平成２５年１１月１５日

平成２５年「まほろば会秋の見学旅行（４０周年記念事業）」資料

平成２５年１１月１５日（金）～１１月１７日（日）

南都七大寺・巨大古墳（大和・河内・和泉路）

まほろば会

はじめに

今回の見学旅行では、「まほろば会発会４０周年記念事業」の一環として、「大和・河内・和泉路の著名寺院（南都七大寺ほか）と巨大古墳（箸墓古墳・仁徳天皇陵ほか）」を訪ねます。

『南都七大寺』という言い方は、最近ではあまり聞く機会がないかも知れませんが、平安時代の末期に南都（奈良）の大寺を見て回った貴族、大江親通（ちかみち）が『七大寺巡礼私記』という書物で書いています。文字通り「南都（奈良）の大きい寺」という意味です。今回は、それらをすべて回ってみようというとても欲張りな企画です。法隆寺・東大寺・興福寺・薬師寺・唐招提寺は、まさに大寺（おおでら）ですね。しかし、西大寺・大安寺となると皆さん首を傾げます。「ここがおおでら？でも、西大寺は『西のおおでら』（東のおおでらが東大寺）と書くね。」百聞は一見に如かず！現地へ行くと『建立当時の寺域』が、説明版に誇らしげに描かれています。例えば「西大寺」は、７８０年に記された財産目録「西大寺資財流記帳（るきちょう）」によると、寺の境内の面積がなんと３１町（１町は約１２０メートル四方）あったといいます。東大寺の５０町には及びませんが、興福寺の２０町よりはるかに大きかったのです。

(48ha)

２日目には、「箸墓古墳」のほか「大神（おおみわ）神社」「飛鳥寺」「甘樫丘」を回ります。「飛鳥寺」は、５９６年に創建された日本最初の本格的寺院（現在は見る影もありませんが一）で、日本最古の金銅仏とされる「飛鳥大仏」が安置されています。近辺地域の最近の発掘調査で、大化の改新や壬申の乱など、古代史の重要事件の舞台となった「槻の木（つきのき）の広場」があったとされる「飛鳥寺西方遺跡」が話題を集めています。

「大神神社」には本殿がありません。背後にある三輪山（４６７メートル）がご神体だからです。三輪山の北西には、邪馬台国の最有力候補地の「纒向遺跡」が広がります。弥生から古墳時代にかけて、この地は為政者の拠点でした。その背景に、三輪山を中心とする信仰と祭祀があったことは間違いないでしょう。

２日目と３日目に訪ねる「巨大古墳」。先ずは「箸墓古墳」です。纒向遺跡の南端に位置し、全長は約２８０メートルのまさに「巨大古墳（前方後円墳）」です。「日本書紀」では、この古墳を三輪山の神である大物主神（おおものぬしのかみ）の妻となった倭迹迹日百襲姫命大市（やまとととびももそひめのみことおおいち）の墓とし、宮内庁もそのように管理していますが、邪馬台国の女王「卑弥呼」の墓ではないかとの説もあり、議論が沸騰しています。

最終日には、日本最大の古墳である「大山（大仙；だいせん）古墳」を歩いて見学します。宮内庁は「仁徳天皇陵」としています。墳丘は、全長約４８６メートル。まさに巨大ちゅうの巨大古墳です。ほかにも、応神天皇陵といわれる「誉田（こんだ）御廟山古墳」なども訪ねます。

それでは、２泊３日の「まほろば会秋の見学旅行（大和・河内・和泉路）」を、一緒に楽しみましょう。

幹事一同

平成２５年度　まほろば会秋の見学旅行（大和・河内・和泉路）予定表

＜日程＞　平成２５年１１月１５（金）から１７日（日）までの２泊３日の旅行です。

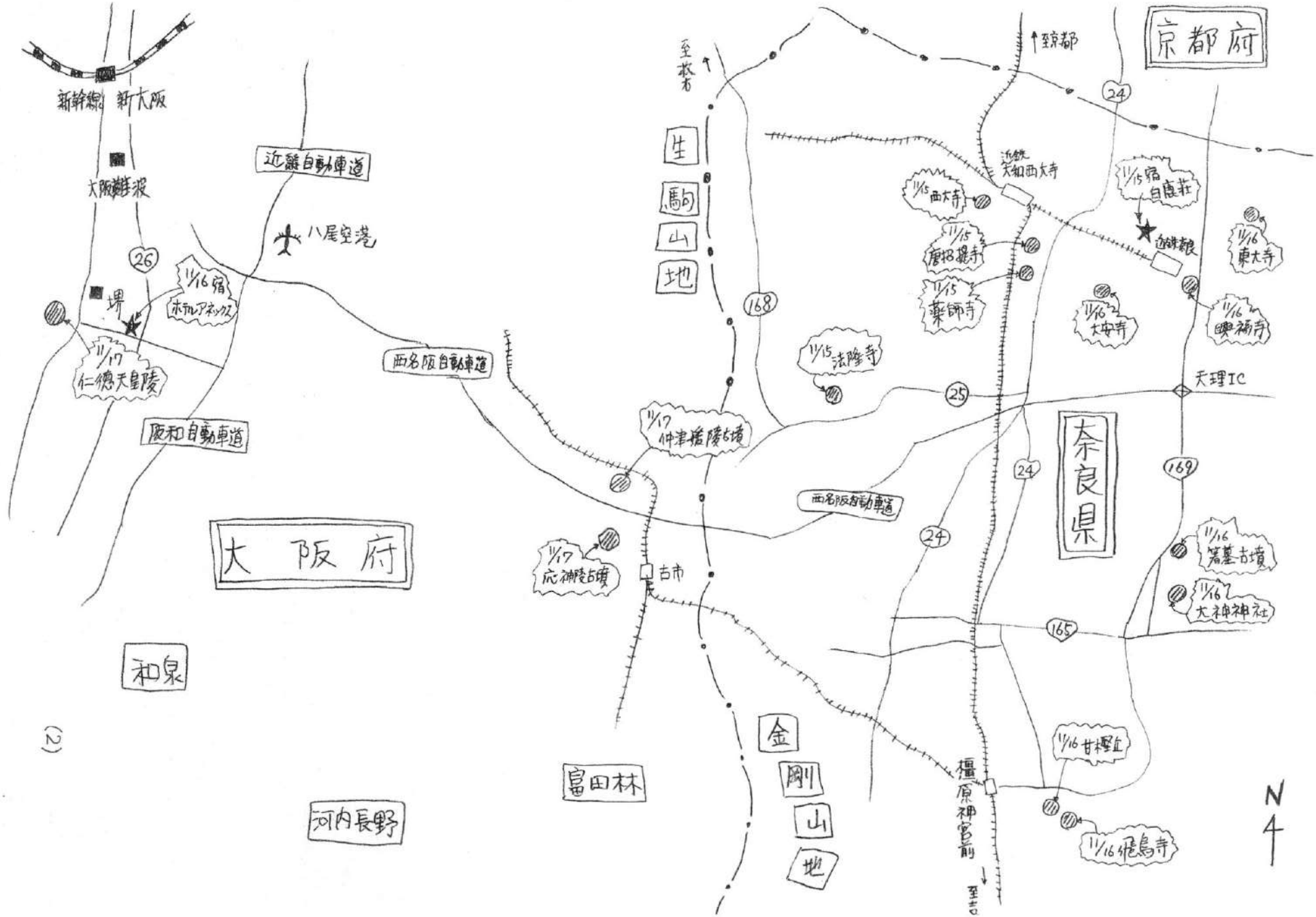
＜集合＞　１１月１５日（金）１１時３０分までに「近鉄 大和西大寺駅南改札口」付近に、各自昼食を済ませて集合します。

＊全員集合ののち、西大寺を見学してから奈良交通のバスに乗車し、下記「見学予定地」を回ります。

＜解散＞　１１月１７日（日）１６時ごろ「東海道新幹線 新大阪駅」にて解散します。

＜見学予定地＞

１１月１５日（金）	西大寺	奈良市西大寺芝町１－１－５	℡０７４２－４５－４７００
	唐招提寺	奈良市五条町１３－４６	℡０７４２－３３－７９００
	薬師寺	奈良市西ノ京町４５７	℡０７４２－３３－６００１
	法隆寺	生駒郡斑鳩町法隆寺山内１－１	℡０７４５－７５－２５５５
（宿泊地）	「白鹿荘」	奈良市花芝町４	℡０７４２－２２－５４６６
１１月１６日（土）	興福寺	奈良市登大和町４８	℡０７４２－２２－７７５５
	東大寺	奈良市雑司町４０６－１	℡０７４２－２２－５５１１
	大安寺	奈良市大安寺２－１８－１	℡０７４２－６１－６３１２
（昼食）	そうめん処「三輪茶屋」	桜井市箸中８７８	℡０７４４－４３－６６６１
	箸墓古墳	桜井市箸中	
	大神神社	桜井市三輪	℡０７４４－４２－６６３３
	飛鳥寺	明日香村飛鳥６８２	℡０７４４－５４－２１２６
	甘樫丘	明日香村豊浦	
（宿泊地）	「ｼﾃｨﾎﾃﾙｻﾝﾌﾟﾗｻﾞｱﾈｯｸｽ」	堺市堺区竜神橋町１－１－２０	℡０７２－２２２－６６３３
１１月１７日（日）	大仙公園	堺市堺区百舌鳥夕雲町３丁	℡０７２－２４１－０２９１
	堺市博物館	堺市堺区百舌鳥夕雲町２丁大仙公園内	℡０７２－２４５－６２０１
	仁徳天皇陵（大仙陵古墳）	堺市堺区大仙町	
（昼食）	シティホテル「青雲荘」	堺市堺区出島海岸通２－４－１４	℡０７２－２４１－４５４５
	応神天皇陵（誉田御廟山古墳）	羽曳野市誉田	
	誉田八幡宮	羽曳野市誉田３丁目２－８	℡０７２９－５６－０６３５
	道明寺天満宮	藤井寺市道明寺１－１６－４０	℡０７２－９５３－２５２５


新幹線 新大阪
大阪難波
近畿自動車道
八尾空港
26
堺
11/16 宿 ホテルアネックス
11/17 仁徳天皇陵
阪和自動車道
大阪府
和泉
河内長野
西名阪自動車道
11/17 仲津媛陵古墳
11/17 応神陵古墳
古市
168
生駒山地
富田林
金剛山地
至松本
至京都
京都府
24
近鉄 天知西大寺
11/15 西大寺
11/15 唐招提寺
11/15 薬師寺
11/15 法隆寺
11/15 宿 自由荘
近鉄 奈良
11/16 東大寺
11/16 興福寺
11/16 大安寺
天理IC
25
奈良県
169
11/16 箸墓古墳
11/16 大神神社
165
11/16 甘樫丘
11/16 飛鳥寺
橿原神宮前
至吉野
N

奈良の寺院見学のための基本知識

[一] 寺院建築の変遷と特色

飛鳥時代（七世紀前半）

日本に仏教が伝来したのは、六世紀中ころであるが、やがて法隆寺、飛鳥寺、四天王寺、川原寺など、大陸の建築様式による仏教寺院が建築された。法隆寺は火災によって焼失し、創建当初のものではなく七世紀中ころの再建といわれているが、わが国最古の寺院建築である。

この時代の寺院建築は、それまでの日本の建築とは大きく異なり、日本で最初の建築様式の革命であったといえる。

特徴としては、基壇が高く、礎石の上にエンタシス（胴のふくらみ）の柱を立て、柱の上部には斗栱（組物）があり、軒は大きく張りひろげている。屋根は瓦葺で、軒は反りがつけられ、壁は土壁となり、木の部分は彩色されていたと伝えられている。

白鳳時代（七世紀後半）

柱のエンタシス（胴のふくらみ）が少し残り、組物に変化がみられる。屋根は飛鳥時代よりも勾配がゆるく、軒や細部の曲線にはなお強いものが残る。また柱の上の三手先斗栱（軒の出を出すために手先となる組物）が生まれたのもこの時代からで、隅のおさまりもよい。

薬師寺の三重塔にこの時代の面影が残る。

奈良時代（八世紀）

平城京に都が移され、安定した政治が行われると共に、日本の仏教は栄えていった。

中国の唐から新しい建築様式が伝わり、都を中心として、これまでとは違った様式の寺院が都を中心として次々と建てられ、彫刻、工芸、書、絵画などの仏教美術も発展していった。

この時代の寺院建築の特徴としては、飛鳥時代にあった柱のエンタシス（胴のふくらみ）の技法が使われなくなり、組物や軒の形や構造もかなり変化し、伽藍配置も変化していった。代表的な寺院に、国をあげて造営した総国分寺東大寺がある。

やがて奈良時代の寺院建築様式が、日本の寺院建築の基本的様式となっていく。さらにこの時代の寺院建築は、神社建築にも大きな影響を与えている。

平安時代（九～十二世紀）

平安時代は、約四百年もの永い間続いたが、都のあった京都が度重なる火災にあったため、伝えられる建物は少ない。しかし、全国に寺院建築がひろがっていったのは、この平安時代からである。この時代は、日本独自の文化が生まれ、大陸の模倣であった寺院建築にも、日本的なものが加わり変化していった。

また、密教が伝わり、山の中にも寺院が造られるようになり、地形によって伽藍配置も大幅に変化していった。

それまで瓦葺であった寺院の屋根にも、当時の住宅建築で使われていた檜皮葺が使用されたり、丸い柱に代わって方柱（角柱）が採用された。

鎌倉時代（十三～十四世紀）

鎌倉時代は、南北朝時代も含めて二百年ほどであるが、建築史上大きな変化があった。大仏様（天竺様）、禅宗様（唐様）、そしてこれらと従来からある和様が混合してできた折衷様が成立したのである。

大仏様（天竺様）は、平安時代末に焼失した東大寺の再建に際し、俊乗坊重源が中国の宋で見てきた手法に工夫を加えてできた新様式である。特徴は、部材の規格の統一や貫を多用し、小さな部材を組んで大きな建物を造ることにある。こうすることによって、構造が強化され、大材を使わずにすむという利点がある。しかしこの様式は、重源一代限りで後には継がれなかった。

禅宗様（唐様）は、栄西により禅宗と共にもたらされ、普及した。和様と比較すると組物が細かく装飾的である。彫刻が多いのも特徴の一つである。

折衷様は、鎌倉時代末期ころにできた様式。平安時代以前の和様と大仏様、和様と禅宗様、和様と大仏様と禅宗様を巧みに組み合わせてできた建築様式をいう。

室町時代（十四～十六世紀）

足利尊氏が京都の室町に幕府を開き、京都が平安時代以後再び政治、文化の中心となった室町時代の前期には、禅宗様の建築物が多く建てられた。また、室町幕府が衰えた後期になると、中央の文化が地方に流れ、各地方に多くの寺院が建てられるようになった。

この時代の特色は、和様と禅宗様が交じり合って発達した折衷様にあり、建物の細部にわたって変化にとんだ装飾が施されている。この手法は寺院建築ばかりでなく、神社建築にも影響を及ぼした。一方、室町時代末期は戦国時代でもあり、数多くの寺院建築が焼失してしまったが、それでも全国各地に多くの建物が伝えられている。

桃山時代（十六世紀末）

豊臣秀吉が京都の桃山城において政治を行い、戦国の諸大名と大商人によって維持された桃山時代は、豪華絢爛とした時代であった。寺院建築もまた桃山様式という華やかな様式に変わっていった。斗栱（組物）にはあまり変化はないが、建物の細部に花や動物を象（かたど）った彫刻を多く用い、極彩色を施し非常に豪華な建築様式になる。またこの時代は、室町時代末の戦乱によって焼失された多くの寺院建築の復興の時代でもある。

鎌倉時代に興された浄土宗・浄土真宗・日蓮宗などの各宗派が、この桃山時代には一般大衆にまで深くひろがり、各宗派の大寺院が全国各地に建てられた。

江戸時代（十七～十九世紀）

これまでの時代の建築は寺院建築が主であったのに対し、江戸時代には城郭、大名屋敷、茶室や数寄屋建築などに力が注がれた。また、この時代になると古い寺院の改修や再建がなされたので、新しい寺院建築様式が生まれるだけの余力がなかったと思われる。しかし、改修によって本来の格調を失った寺院も多いことを考えると、やはり寺院建築自体に力が注がれなかった時代であることには違いない。

日光東照宮のように、建物の細部に細工や彫刻を施し、極彩色に仕上げ、手のかかったものが建てられたとはいえ、特に目新しい特徴はなく、これまでの寄せ集めといえる。

〔二〕伽藍配置

金堂　本堂にあたる建物で「金」とは貴重なことをたとえる場合にも用いられる字で、寺に数多くある建物のうち最も重要で、中心になる堂をいう。内部には広い仏壇（仏像を安置する壇で須弥壇という）が築かれる。

講堂　金堂の北に位置し、僧侶たちが仏法を説き、経や論を講ずるための堂。大勢の僧侶が中へ入るために、内部の仏壇は金堂に比べて小さく造るが、建坪は金堂より広い。

塔　仏教の祖釈迦の舎利（骨）を安置するための建物であるが、仏像や経巻を安置することもある。三、五、七、九、十三重塔などがある。

鐘楼　時を報じたり、法会の際の合図として鳴らす梵鐘を掛けた二階建の建物。

経楼　釈迦の教えを書いた経巻を納めるための建物で鐘楼と同じ形をとる。

食堂　僧侶が食事をするための建物で、僧侶の模範とされる文殊菩薩や賓頭盧尊者を安置することもある。

僧房　僧侶のアパートで長屋にして多くの部屋を仕切り、一面に廊下を設ける。

門　南の正面に構える門を南大門といい、その内側にさらに仏の空間を作るための中門を設ける。

以上のような建物で寺院は構成されているが、その配置は各時代によって、また同じ時代でもいくつかの型式が認められる。

飛鳥寺式（六世紀末）伽藍中軸線上に南大門・中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ。塔の東西には東金堂と西金堂がむかいあう。したがって三つの金堂が塔を囲んで配置される。中門からの回廊はこの三つの金堂を囲うようにめぐる。講堂は回廊の北外に置く。

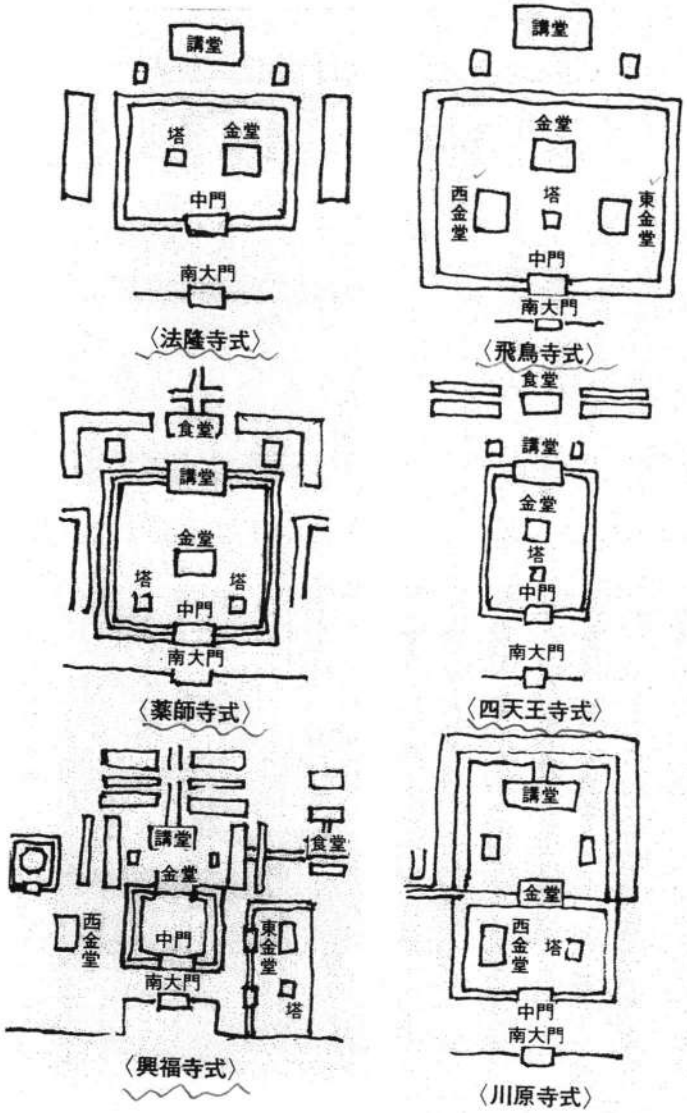
四天王寺式（七世紀初）飛鳥寺式から東西金堂を略した型。中門からの回廊は講堂に接続する。飛鳥寺式と共に塔が寺の中心となる。

川原寺式（七世紀中）金堂の前庭の東に塔、西に西金堂を対面させる。飛鳥寺式から東金堂を省略し、その位置に塔を移した型。

法隆寺式（七世紀後）東に金堂、西に塔を南面して並列する。中門からの回廊はこの金堂と塔を取り囲む。講堂は回廊の外に位置する（ただし平安時代以降は改造され回廊は講堂に接続する）。

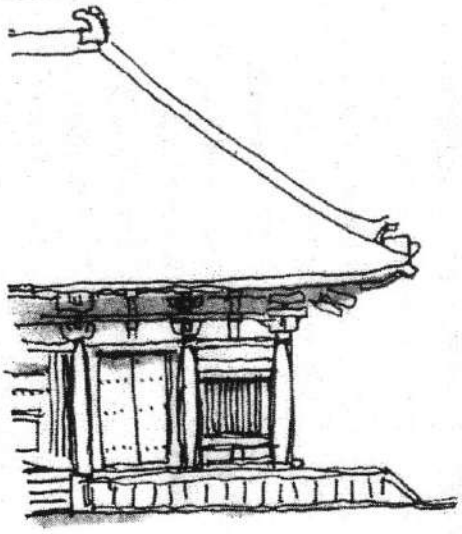
薬師寺式（七世紀後）金堂の前庭東西に二つの塔を対称の位置にむかいあって配置する。中門からの回廊は講堂に接続する。

興福寺式（八世紀初）それまで塔は回廊の中に配置されていたが、八世紀になると回廊の外に出る。興福寺、元興寺、大安寺、東大寺や諸国分寺も同じである。したがって金堂の前庭には建物は建てられない。その中でも興福寺式は飛鳥寺式にみられた東金堂と西金堂が回廊の外に出て、回廊を取り囲むように配置される。この回廊は金堂に接続するために講堂は北外に配される。

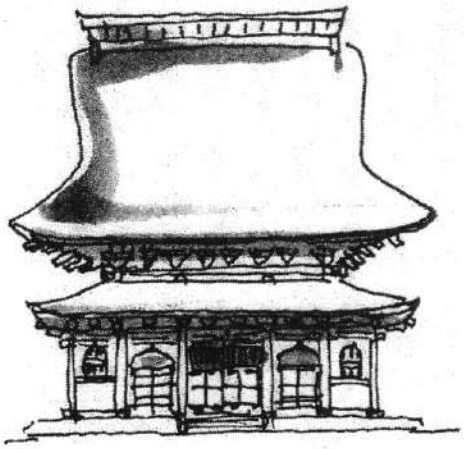


〔三〕 寺院建築様式の分類と名称

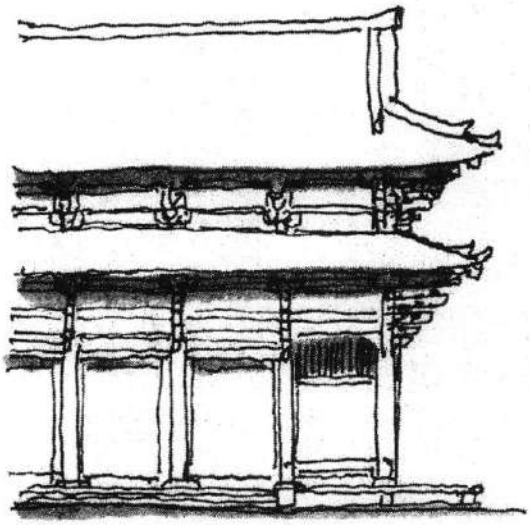
和様　飛鳥時代以来中国から取り入れた建築様式が次第に日本風にまとめられ、奈良時代末には成立した。唐招提寺金堂が代表例。



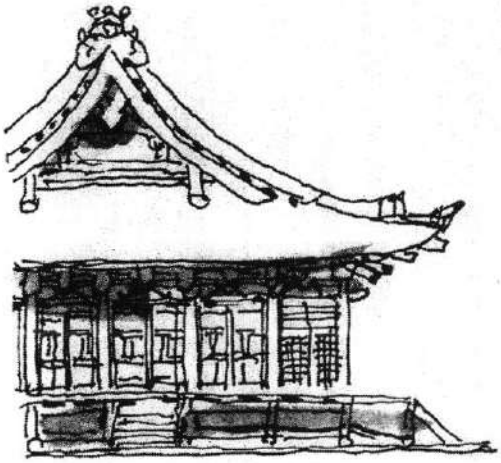
禅宗様（唐様）　鎌倉時代中国から禅宗と共に伝えられた。組物に彫刻を施し、造作にも桟唐戸や花頭窓などを用いた装飾的な建築様式。円覚寺舎利殿が代表例。



大仏様（天竺様）　鎌倉時代中国から伝えられた豪放な建築様式で、東大寺金堂や南大門など大規模な建物に適した構造様式をもつ。



折衷様　以上三つの様式を混合させ、技術的に組み合わせた建物で、和様に大仏様や禅宗様の構造法、細部装飾を取り入れたもので、鶴林寺本堂が代表例。



屋根の形

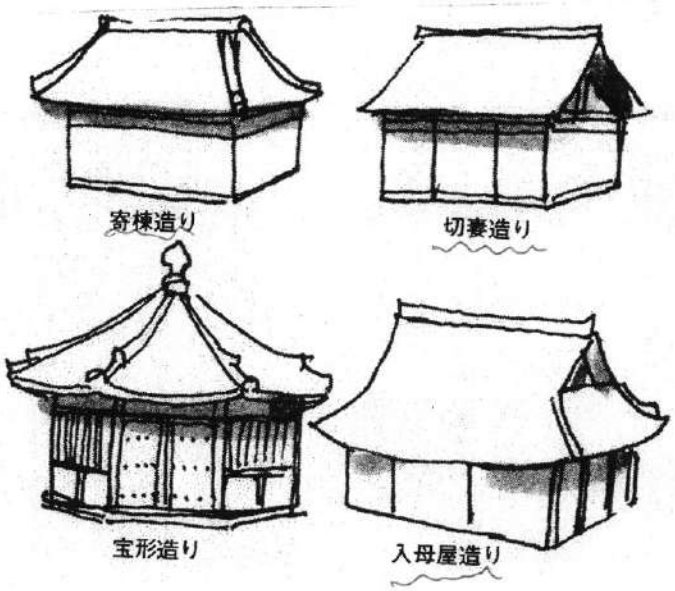
切妻造り　本を開いて伏せたような屋根の造りで、断面が三角形をなす最も簡単な屋根の造り方。付属建物に多く用いられた。

入母屋造り　切妻屋根の両側に袴のような流れ屋根をつけた造り。

寄棟造り　屋根の中央の水平の大棟から四方に葺きおろす造り。正面と背面は梯形、両側面は三角形になる。四柱造りともいう。

宝形造り　平面が四、六、八角形などの建物で、各隅棟が屋根頂上で一点に集まる。

またこれら屋根を葺きあげる材料には、本瓦葺、桟瓦葺、柿葺、檜皮葺、杉皮葺、板葺、茅葺、栩葺、銅板葺などがある。



門

門とは寺院を囲む回廊または塀の中央部に設けられるものが多い。場所や造りによって呼び名が異なるが、寺院の顔ともいえる。

二重門　屋根を二重に造る門。

楼門　二階建、一階に縁、高欄がつく。

八脚門　三間で棟通りに柱が四本立つが、前後四本ずつ立つところから八脚門という。

四脚門　棟下に本柱二本と前後四本の控柱が立つ。

棟門　柱二本で一間、一戸門のこと。

唐門　一間一戸で、照りむくり（波状を呈する）屋根に唐破風（屋根の切妻についている合掌形の反り曲がった曲線状の装飾板）の取り付いた門のこと。

向唐門　平唐門と直角に唐破風の取り付いた門のこと（四方に唐破風が取り付く）。

上土門　一門一戸で、平たい軒屋根に、かまぼこ状に練土を置いた門。

櫓門　城郭などに用いられる二重門。

高麗門　本柱の後方に控柱を立て、その間を小屋根でおおう門。

塀重門　建物門を塀で仕切り、その塀に重ねるように取り付けた簡単な門。

薬医門　本柱どおりに扉を設け、その後方に控柱を立て棟木は本柱と控柱の中間にある門。

四　仏像とは

人はどのようなときに仏像を拝むのであろうか。

病気をなおしてほしいとき、様々な願いがかなってそのおれをするとき、過去に犯した罪の許しを乞うとき、死後の安楽を願うとき、お酒やタバコを断つという決意を示すとき…。

それではなぜ仏像を拝むのであろうか。

真理をさとった人（仏陀）、完全なる人格者（如来）であり、理想的人間である釈迦を拝むということは、仏教的にも十分に根拠のあることである。

仏像とは本来仏教の祖釈迦に、宗教的理想を加味した理想的人間像である。のちに阿弥陀や薬師などの如来像、観音や文殊などの菩薩像、不動や愛染などの明王像、梵天や帝釈天などの天部像、釈迦の弟子の羅漢像をも仏像と呼ぶようになり、広く仏教像をさすようになった。

これらの像はすべて頭の飾りや、着るもの、手に持つ物、坐り方、乗る台まで、それぞれに意味があり、様々な約束事に基づいて造られている。

このことを知ると知らぬとでは大変な違いがある。寺や博物館で仏像を見て、仏像の名や、材質、造られた年代を自分で考えるのは仏像を鑑賞する大きな楽しみである。

仏像の誕生

仏教は今から約二千五百年ほど前に、インドで釈迦（仏陀・如来）が始めた宗教である。

仏教が誕生してから、約五百年ほどの間、仏像は造られなかった。そして仏像をはじめて造ったのは、東西文明の接点というべき北インドのガンダーラ地方でアレキサンダー大王に率いられて来たギリシヤ、西アジア系の工人の子孫であった。神を姿にあらわすことを知っていた彼らにとって、仏教の祖・釈迦の像のないことは大いに不満であったに違いない。そのほかにも様々な要因も加わって、ついにここに釈迦の像が造られた。紀元一世紀のことである。

したがって彼らが造った釈迦像は、西洋人風のギリシヤ・ローマ系の神像によく似る。

時を同じくしてインド中央部のマトーラ地方でも古くからのインドの神像の伝統を受け継ぐ釈迦の像が造られた。そのためガンダーラ像と比べた場合に、これが同じ釈迦の像なのかと目を疑うばかりに異なる。

ところでよく知られるように、釈迦には三十二相八十種好という普通の人とは異なる様々の特性と福相があるとされる。これは仏像が造られた後に、それまで仏典で様々に述べられてきた釈迦の普通の人にはない特性と福相とが徐々に整備され、まとめられたものである。

仏像の種類

如来像　仏教徒の理想であり、仏教徒は修行してさとりを得ると、誰でもこのような姿になることができる。身には一枚の衣をつけるだけで、静かに蓮華の上などに坐ったり立ったりする。

菩薩像　如来になるために修行をしている人である。髪を結い、装飾品を身につけ、手には武器や蓮華を持ち、やさしい表情をとる。

明王像　如来が激しい怒りをもった姿に身をかえた。

天部像　もともとインドや西方の異教の神々で、武神、福神、男神、女神もいる。

羅漢像　釈迦の弟子たちである。

釈迦の身体的特徴

（『大智度論』による）

〈大相三十二相〉

1．足下安平立相（足の裏が平らで、大地に立つと地と足の間が密着する）
2．足下二輪相（足裏に千輻輪があらわれている）〈手足具千輻輪相〉
3．長指相（指が繊く、長い）
4．足跟広平相（足の踵が広く、平らで、円満である）
5．手足指縵網相（手足の指の間に水掻きのように膜がある）
6．手足柔軟相（手足が柔軟で、高貴の相をなす）
7．足趺高満相（足の甲が高く、盛り上がっている）
8．伊尼延膝相（膝が伊尼延〈羚羊の一種〉のように繊く、円い）
9．正立手摩膝相（直立したときに、手が膝をなでるくらいの長さである）
10．陰蔵相（馬王、象王のように陰相が隠されている）
11．身広長等相（身長と両手を広げた長さとが等しい）
12．毛上向相（身体に生えているすべての毛が上に靡いている）
13．一一孔一毛生相（一つの毛孔には必ず一本の毛が生えている）
14．金色相（全身が微妙金色に輝いている）（後背）
15．丈光相（仏身の四辺に一丈の長さの光が輝いている）（10R：約3m）
16．細薄皮相（身体の皮は細薄で、いっさいの塵も汚れもつかない）
17．七処隆満相（両手、両足、両肩、首すじの肉が、円満で柔軟である）
18．両腋下隆満相（腋の下にも肉がついていて、凹所をつくらない）
19．上身獅子相（上半身が威容端厳なること獅子の如くである）
20．大直身相（仏の身体は広大で、端直無比である）（大男）
21．肩円好相（仏の両肩は円満で、豊かな状態である）
22．四十歯相（四十歯が美しく並び、鮮白で、清潔である）
23．歯斉相（歯の大きさが一定で、隙間がなく、離れてみると一本にみえるほど美しい）（多い）
24．牙白相（四十歯とは別に上下二本ずつの牙があり、鮮白で、鋭利である）
25．獅子頬相（獣王獅子の如く両頬が広く、豊かである）
26．味中得上味相（仏の口はつねに最上味をあじわう、何を食べても最上の味である）（ぜいたくはしない）
27．大舌相（仏の舌は軟薄にして広長で、もし口より出せば顔全体を覆い、髪のはえぎわまで届き、口に入っても口中に一杯にならない）
28．梵声相（梵天王のように美しく、大きい五種の声を出し、聞く者を感嘆させる）
29．真青眼相（仏の眼睛は青蓮華のように紺青色である）
30．牛眼睫相（仏のまつげは、牛王のように長く、美しく、乱れていない）
31．頂髻相（頭頂の肉が隆起しており、その形が髻のようである）〈肉髻相〉（知恵）
32．白毫相（仏の眉間には白毛があって右旋しており、のびると一丈五尺になる）（4.5m）

※ このほか、「螺髪」（巻貝）「胸上卍字相」をあげる経典もある。

〈小相八十種好相〉　（例）　3．眉は初生の月（新月の次の日）の如く、紺瑠璃色である
4．耳輪が垂れている
31．臍は深く、円好である
79．髪の色は青珠の如し

如来像

釈迦如来像が基本となるのであるが、釈迦を普通の人間よりはるかに超えた理想的存在ととらえ、三十二相八十種好という特徴を体にそなえている。たとえば体は金色で、頭上は皿のように肉が盛りあがり、眉間には白毫（白い巻毛）をつけ、手と足の指の間には水鳥の水かきのような皮膜がある。体の回りには一丈の長さの光が輝く等々である。

如来とは完全なる人格者のことで、さとりを開いた人はすべて如来と呼ばれる。また仏陀とは真理、本質をさとった人をさす普通名詞で、さとった人はすべて仏陀である。したがって普通は同じ意味に考えてさしつかえない。

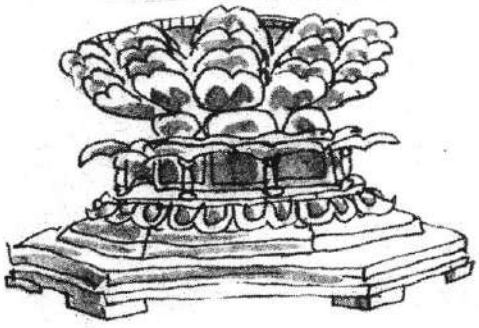
頭には螺髪（ちぢれた髪の粒）をつけ、身は一枚の衣でつつむ。衣のつけ方に、右肩を出す偏袒右肩と、両肩ともつつむ通肩の二種がある。手は印相といって種々の形をとり、この形によって如来の種類を見分ける。

立像は直立する。

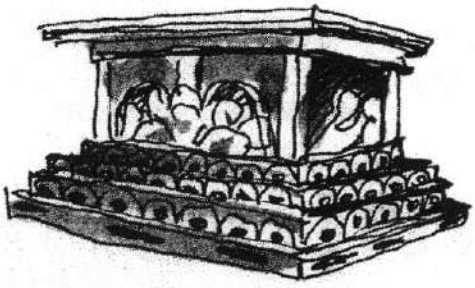
坐像はその坐り方を結跏趺坐するという。膝の上に足の甲を重ねあわせて坐るのであるが、このときに左足を外にするのを降魔坐、右足を外にするのを吉祥坐という。

倚像は椅子に腰かける。

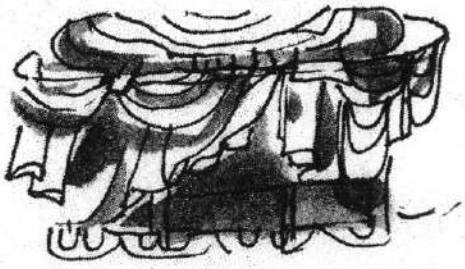
如来が立ったり坐ったりする台座には蓮華座、宣字座（須弥座）、裳懸座がある。蓮華座は蓮の華を形造った台で、框と反花、蓮華を積み重ねた簡単な三重座から、最も豪華な十二重座までである。宣字座は宣の字に似た台座で、像が直接坐る受座の下に胴となる箱を置き、その下に反花や框をおく。これに如来が身につける裳が垂れたのが裳懸座である。



蓮華座



宣字座（須弥座）



裳懸座

倚像　坐像　立像

菩薩像

菩提薩埵の略で、本来は出家以前のさとりを求めて修行をしていた釈迦につけられていた名であったが、大乗仏教の時代になると釈迦以前にも如来がいた。また未来にも如来が出現すると考えられるようになり、その如来に到達するために自ら修行し、また他人をもさとりに導こうとする偉大な志をもつ者すべてを菩薩と呼ぶようになる。

したがって菩薩は大勢いるが、この中でも最高位にいて、如来の補佐ができるくらいに修行を積んだ菩薩を補処の菩薩といい、如来の脇侍として従うことが許される。

菩薩の基本の型は王子時代の釈迦の姿である。頭髪は高く結いまた両肩に垂らし、宝冠を戴き、白毫をつけ、天衣（両肩から垂らした幅のせまい布）や条帛（肩から脇へ斜めにかけ、その端を腹に垂らした布）をかけ、下半身には裙衣（体の正面であわせる腰まき）をまとい、胸や腕に飾りをつけ、手に剣や蓮華、水瓶などを持つ。

立像は直立した像もあるが、一方の足に重心をかけ、他の足を少し前に出した像もある。

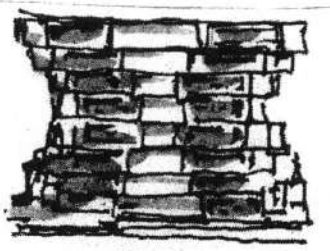
坐像は、あぐらをかくように足を組み、左右どちらかの足の甲を膝の上にのせる半跏趺坐が多いが、結跏趺坐した像もある。

その他椅子に坐り半跏趺坐した片方の足を下へおろした半跏踏み下げ坐、片方の足を前にはずした遊戯坐、片方の足を組まずに上へ折り曲げ、もう片方の足の裏を踏む輪王坐、跪坐（正坐）したり、跪坐して体を前に乗り出したり、蹲踞した像もある。

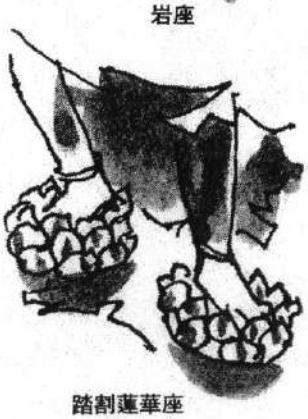
明王像

威厳をもち、もの静かに人々を丁寧に教え導くのが如来であり、直接手をさしのべて教え導くのが菩薩であるとすれば、この明王はそんな生やさしい諭し方では聞き入れない者たちを叱りつけ、剣をつきつけて脅し、如来の理想とする生き方をさせようとする。したがって明王は如来が忿怒相に変化した姿であるとされる。つまり明王というのは明呪（陀羅尼）を唱えることによって効験をあらわす仏であり、如来の命令を受けて悪を打ち破る使者―持明使者のことである。

明王は大日如来が姿をかえたものであり、したがって密教の仏である。大乗仏教は顕教と密教とに大別される。顕教とは釈迦が人々の性質や能力に応じて説かれた教えであり、密教とは大日如来が自らのさとりの内容を示した身体、言葉、心の秘密の教えである。この秘密は大日如来だけが知っていて、如来の神秘的な威力の加護によらない限り知ることはできないとされる。


瑟々座

岩座

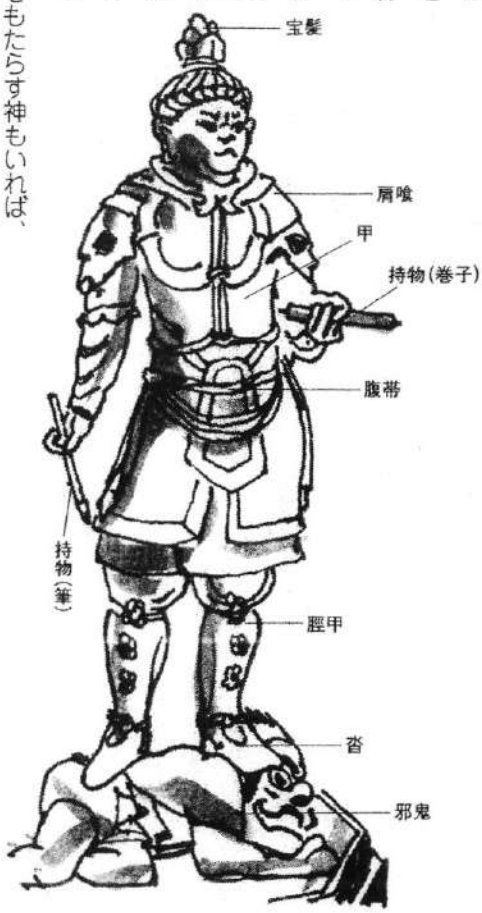

踏割蓮華座

不動明王は瑟々座という角形の木を井桁に組み積みあげた台の上や、岩座の上に乗る。降三世明王は悪の象徴である大自在天と、その妃の烏摩を踏みつけ、軍荼利明王と金剛夜叉明王は二つの蓮華の上に、また大威徳明王は水牛の上に、愛染明王は水瓶の上の蓮華の上に、孔雀明王は孔雀の上の蓮華の上にそれぞれ乗る。

天部像

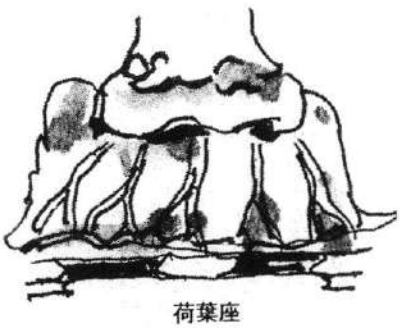
天というより神といった方がわかりやすい。如来、菩薩、明王の教えは、とにかくむつかしい。いくら聞いてもよくわからないところがある。しかし神は大変にわかりやすい。

仏教的に位置づけられた梵天や帝釈天を除くとほとんど仏格が低い。インドや西方の民俗宗教の神々、つまり霊や自然現象を神格化した神々で、人に利益をもたらす神もいれば、危害を加える悪鬼や蛇神もいる。これらの神々が仏教に取り入れられ、仏法の守護神となり、また仏教をひろめる僧や、信仰する人たちの幸せを保障する神としての役目を与えられた。つまり仏教がインドの人々の間に浸透してゆくために、インド古来の土着の善神はもとより、悪神・鬼神さえもが釈迦の教えにふれて、仏教の守護神となったということを知らしめる必要があった。

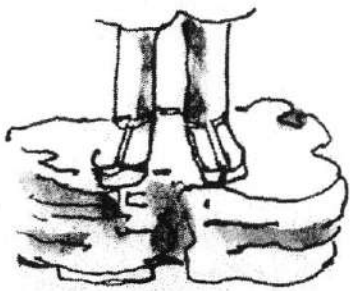


守護の役目をもつところから、甲をつけ兜をかぶり、武器を持ち武装した神や、福徳を授け、富と繁栄をもたらすとされ、インドでは大変に信仰を集める女神もいる。

天部像は蓮華座には乗れず、やっと蓮の葉で造った荷葉座に乗せてもらえる。その他岩座や、岩座に乗る邪鬼を踏みつけたり、岩座の上面のゴツゴツした所を平らにしたような洲浜座に乗る。



荷葉座



洲浜座

禽獣座

〔五〕 仏像の材質と技法

仏像は金・銀・銅・鉄といった金属、土、漆、木、紙、石などで造られる。それではどのような方法で造られるのかをみてみよう。

鋳造

銅と錫の合金である青銅で造られるのがほとんどである。これについてみてみよう。

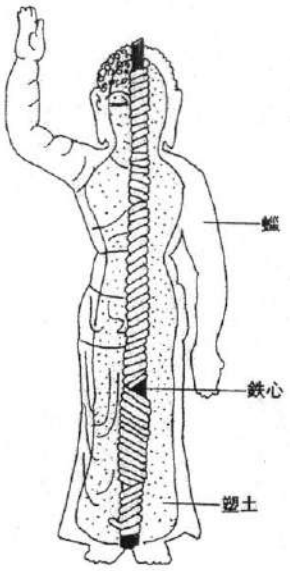
①鉄心に藁を巻く。

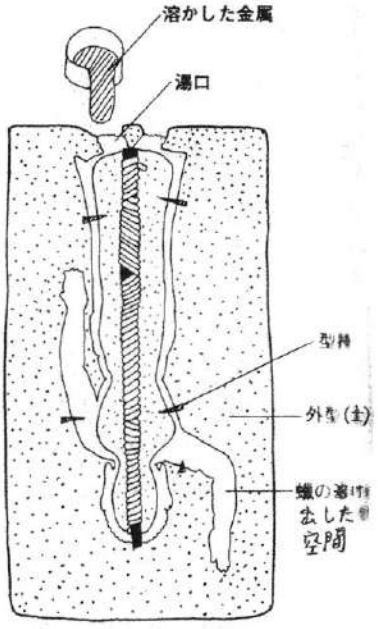
②この周りに土を巻く。この土を中型という。

③中型の周りに蠟に松脂などを混ぜて作った蜜蠟を巻き、これに彫刻して蠟の像を造る。

④これを土でおおい（外型）、熱を加えると蠟が溶け出し、中型と外型の間に空間ができる。

⑤この空間へ熱して溶けた青銅を流し込み、固まったところで、中型と外型の鋳型を取り去る。

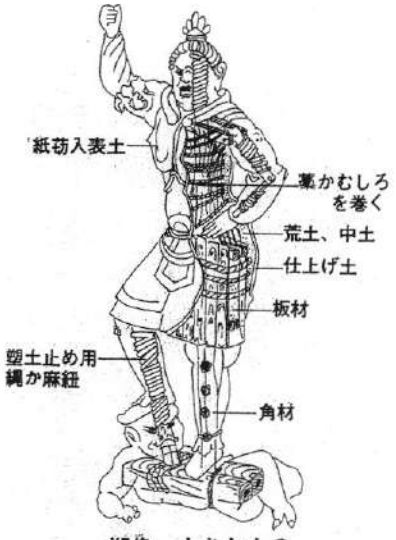




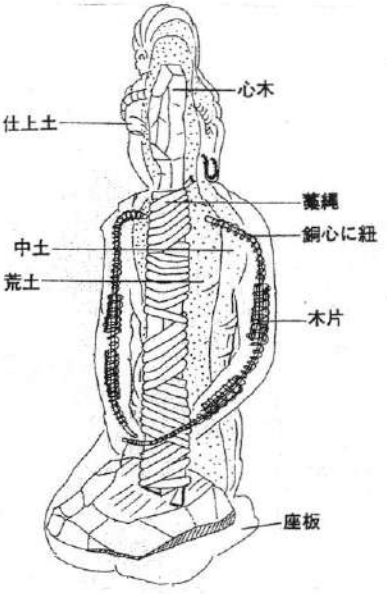
こうして造られた像に細部の仕上げや文様を彫り込む。そして金を溶かした水銀を塗りつけ、熱を加えて水銀を蒸発させ、金を定着させる。つまり金メッキを施す。これを金銅像という。釈迦の三十二相の一つに全身が金色であるとされるが、木彫の像にも漆を塗りその上に金箔を張る。

塑造

つまり土で造った像で、台に固定した心木に藁を巻いて、スサやモミを混ぜた荒土をつけ、大体の像容を造り、雲母などを混ぜた細砂で仕上げをし、彩色したり金箔を張る。また埴仏といって石や木の型から造り焼成する像もある。



塑像、大きなもの



塑像、小さなもの

乾漆造

脱活乾漆造と木心乾漆造がある。

脱活乾漆造は基本的には塑造と同じであるが、仕上げは、麻布を漆で数枚張り重ねて乾かし、中の塑土を取り去る。張り子になった像の中に補強材を入れ、木の引き粉を混ぜた木屎漆や麦を混ぜた麦漆を表面に塗り、彩色したり金箔を張りつけて仕上げる。

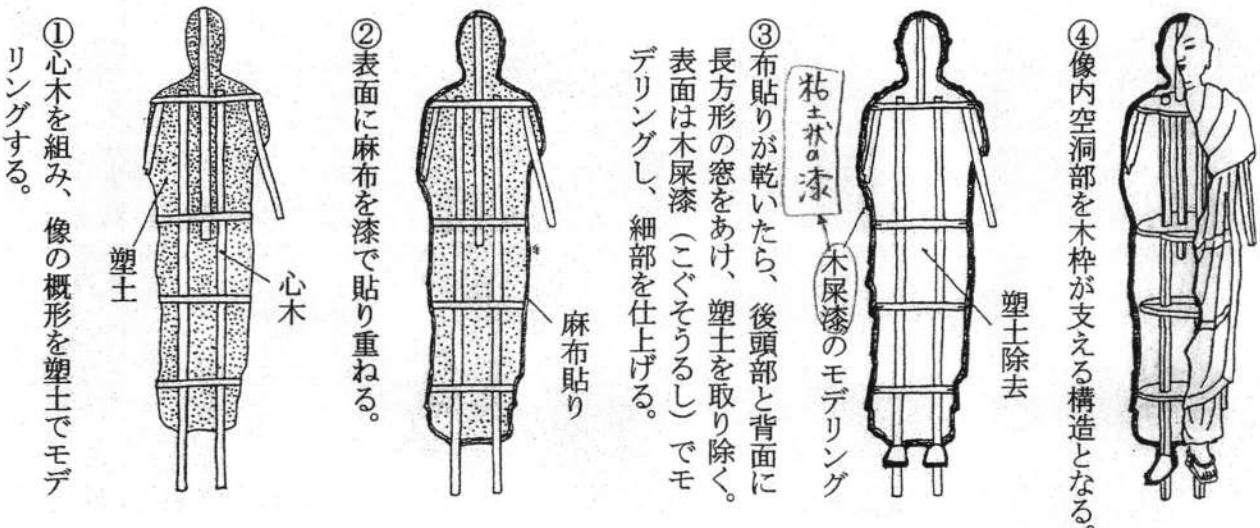
木心乾漆造は木で大体の型を造り、その上に木屎漆や麦漆を盛りつけて造像する。

木心乾漆

脱活乾漆

脱活乾漆像の制作技法

興福寺（旧西金堂）十大弟子像　天平6年（734）



①心木を組み、像の概形を塑土でモデリングする。

②表面に麻布を漆で貼り重ねる。

③布貼りが乾いたら、後頭部と背面に長方形の窓をあけ、塑土を取り除く。表面は木屎漆（こぐそうるし）でモデリングし、細部を仕上げる。

④像内空洞部を木枠が支える構造となる。

木造

樟、檜、桜、桂材などが用いられる。一木造りと寄木造りがある。

一木造りは一本の木から彫り出される像であるが、手や足先、裳先は別材が取り付けられることもある。大きい像の場合は干割れを防ぐため、像の内部を空洞にする内刳りがおこなわれることがある。

寄木造りは頭と胴部を前後、または左右に二材、あるいは四材を合わせ、内刳りを完全に施して矧ぎつけ彫刻する。大きな像を造ったり分業する場合に便利である。彩色を施したり下地の上に漆で金箔を貼ったりする。

寄木造り　一木造り

〔六〕 仏像の時代別特徴

飛鳥時代（七世紀前半）

金銅仏や樟材の木彫仏が多い。立像は直立し、坐像は正しく正面をむく。顔は面長で、眼はギンナンの形で、唇には微笑を浮かべ、衣の皺は縦線が多く、左右相称である。顔と手足は意識的に大きく造られている。

白鳳時代（七世紀後半）

銅造が多い。飛鳥から天平への過渡期にあたる。体の表現が前代に比べてやわらかくなり、顔に丸味がつき、いわゆる童顔になっている。目は細く伏し目で、唇は前代ほどではないが微笑している。開放的で、みずみずしく、若さあふれる像が多い。

天平時代（八世紀）

鋳造、塑造、乾漆造、木造などあらゆる素材が用いられた。体は均整がとれ、肉感的で張り切っている。表情は威厳があり、理想的な写実的表現がなされ、優美、自由、伸びやか、柔軟といった言葉が与えられる。

平安時代初期（九～十世紀）

木心乾漆造もあるが、木造が主流になる。一木造りの像に象徴されるように、量感たっぷりで、必ずしも均整がとれているとはいえない。表情はきびしい。衣文の彫りはするどく角張った波と丸い波を繰り返してきざむ翻波式衣文が流行する。

平安時代後期（十一～十二世紀）

木造が主流を占めるが、石造や銅造もある。木造は一木造りに代わって寄木造りになる。定朝様といって、貴族好みの優雅でやさしく美しく、軽妙な像が好まれた。体は胸が薄く、衣文の彫りは浅い。奥行がなく立体感がとぼしい。

鎌倉時代以降（十三世紀以降）

木造が主流であるが、銅造にもすぐれた像がある。体はバランスがとれ、衣文も太く強い。表情は生き生きとし、はつらつとしてみずみずしい。眼は水晶を用いて造られる。

室町時代以降の仏像彫刻は従来の繰り返しで、彫刻的には新しいものはみられない。

[七] 各宗のあらまし

現在日本には、どれくらいの宗があるのだろうか。中国から日本に仏教が組織的に移入されたのは、奈良時代である。伝来の順を追えば、三論宗、成実宗、法相宗、倶舎宗、華厳宗、律宗の六つで、南都六宗と呼ばれる。

これらのうち、成実宗と倶舎宗は、三論宗、法相宗それぞれの付属参考的なものとみなされ、一宗として独立できなかった。以後、平安時代の天台宗、真言宗と続き、三論宗は鎌倉時代に入り滅びてしまう。

ここで注意しなければならないのは、南都の六宗の宗と、今日一般に理解されている宗との違いである。もともとインドにおける仏教に宗はなく、中国のそれとも違う。多分に学問的なものであり、大学における学部、学科程の意味合いである。

時代が下るにつれて、社会状況の変化進展に伴い、仏教も一般に希求受容されるようになった。南都六宗の論理的教学を父とし、真言と天台の神秘的教学を母として、平安末以降、新たな諸宗が生まれる。浄土系諸宗四、禅系諸宗三、日蓮宗である。しかし、それら新諸宗に使われ、現在でも使われている宗の意味は、信仰をもとにした心のよりどころをさし、仏教において中国で十三宗がいわれたように、日本でも十三宗をたてたのである。

宗名	宗祖	派祖	本山
法相宗	窺基		興福寺
			薬師寺
華厳宗	良弁		東大寺
律宗	鑑真		唐招提寺
		叡尊	西大寺(真言律宗)
天台宗	最澄	円珍	園城寺(天台寺門宗)
		真盛	西教寺(天台真盛宗)
真言宗	空海		金剛峯寺(高野山真言宗)
		聖宝	醍醐寺(醍醐派)
		専誉	長谷寺(豊山派)
		玄宥	智積院(智山派)
		俊芿	泉涌寺(泉涌寺派)
		寛平	仁和寺(御室派)
融通念仏宗	良忍		大念仏寺
浄土宗	法然		知恩院
		准如	西本願寺(本願寺派)
浄土真宗	親鸞	教如	東本願寺(大谷派)
		真慧	専修寺(高田派)
時宗	一遍		清浄光寺(通称遊行寺)
臨済宗	義玄	慧玄	妙心寺(妙心寺派)
		栄西	建仁寺(建仁寺派)
		疎石	天龍寺(天龍寺派)
		妙超	大徳寺(大徳寺派)
		道隆	建長寺(建長寺派)
		祖元	円覚寺(円覚寺派)
曹洞宗	道元		永平寺
			総持寺
			久遠寺
日蓮宗	日蓮	日興	要法寺(日蓮本宗)
		日陣	本成寺(法華宗陣門流)
黄檗宗	隠元		万福寺

「南都七大寺」について

今回の見学旅行で訪問する「南都七大寺」について、若干の解説をします。
インターネットで検索した結果は下記のとおりでした。

南都七大寺（なんとしちだいじ）は、奈良時代に平城京（南都・奈良）及びにその周辺に存在して朝廷の保護を受けた 7 つの大寺を指す。興福寺（こうふくじ、奈良市登大路町）、東大寺（とうだいじ、奈良市雑司町）、西大寺（さいだいじ、奈良市西大寺芝町）、薬師寺（やくしじ、奈良市西ノ京町）、元興寺（がんごうじ、奈良市中院町、芝新屋町）、大安寺（だいあんじ、奈良市大安寺）、法隆寺（ほうりゅうじ、生駒郡斑鳩町）。しかし、法隆寺は斑鳩に所在しているため、この法隆寺の代わりに唐招提寺を入れて南都七大寺とする説もある。また、歴史的経緯（四大寺から数を増やしていったとする見地）からして西大寺の代わりに由緒ある川原寺（現在の弘福寺）を加える説もある。（フリー百科事典「ウィキペディア」）

平城京およびその周辺の七つの大寺。東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺。法隆寺を除き、唐招提寺を入れた例もある。飛鳥時代には、大安寺、薬師寺、元興寺、弘福（ぐふく）寺を四大寺と称したが、奈良遷都後は大安寺、薬師寺、元興寺、興福寺を四大寺と呼び、ほかに五大寺、六大寺の称も行われた。七大寺は聖武天皇の崩じた翌々日および初七日すなわち756年（天平勝宝8年）5月に、七大寺に誦経せしめた「続日本紀」というのが初めての記載で、その後796年（延暦15年）11月「日本後紀」などに見える。「続日本後紀」「文徳実録」「三大実録」や「延喜式」などにも言及されており、「扶桑略記」に七大寺の寺名が記されている。また、「七大寺巡礼私記」「七大寺日記」「七大寺年表」（以上平安末期）、「七大寺巡礼記」（室町時代？）などがある。（小学館「日本大百科全書」）

単に「七大寺」と呼ぶこともある。南都（＝奈良）古代の官大寺のことである。大官大寺、川原寺、飛鳥寺の3寺であったが、のちに薬師寺が加えられ四大寺となり、平城遷都（710年）後には、大安寺、薬師寺、元興寺、興福寺、東大寺の五大寺が成立し、それぞれ学派仏教を形成した。さらに西大寺、法隆寺も加わって、都が平安京に遷る（794年）とともに、旧都の官大寺は「南都七大寺」と呼称された。京都の公卿たちは「南都七大寺」を廻ることが多くなり、そのときの巡礼記として1140年（保延6年）の大江親通の「七大寺巡礼私記」などが伝わっている。（フリー仏教百科事典「ウィキダルマ」）

奈良(南都)にある七つの大寺。677 年(天武 6 年)の大官大寺に始まる大寺制は，四大寺，五大寺と発展し，756 年(天平勝宝 8 年)5 月に七大寺の名が初見する。8 世紀後半に西大寺が創建されるに及んで，東大寺，大安寺，興福寺，元興（がんごう）寺，薬師寺，法隆寺，西大寺を七大寺と称するにいたった。大寺の造営にはそれぞれ官営の造寺司を設けてことに当たり，経営維持のため莫大な封戸・荘地が施入され，別当や三綱が寺・寺僧の運営指導に当たった。（世界大百科事典）

等々

●上記検索結果からも分かるように、時代の変遷により(当然のことながら)「七大寺」に数えられる寺名も変わってきています。文献資料もいろいろとあり、その文献が書かれた時代背景というものが影響を与えています。しかも、所在地が「斑鳩」ということで、法隆寺をはずすという説まであるのです。

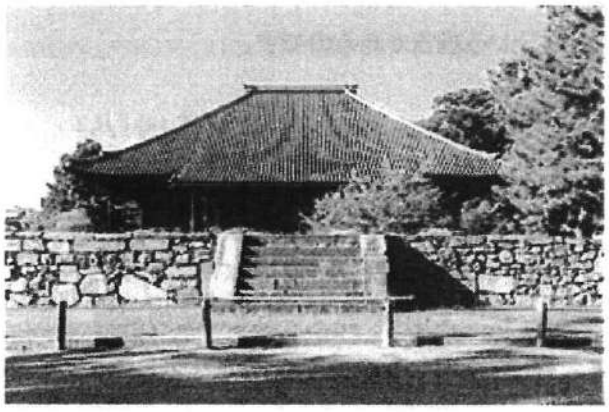
今回の「まほろば会秋の見学旅行」では「南都七大寺」見学を一つの目玉にしました。寺数も「五」や「八」や「十五」などとせずに、「七」に拘(こだわ)りました。それは、あくまで平安時代の貴族「大江親通」の書いた「七大寺巡礼私記」に準拠したからです。親通が「七大寺巡礼私記」を書いたのは、1140年(保延6年)に南都の大寺を訪れた際です。時代は既に「平安時代の末期」であり、飛鳥・平城に都があったときとは当然様変わりしています。政・文化の中心は「平安京」に移り、特に大安寺・西大寺などはその規模においても、往時を偲ぶべくも無かったと思います。ただ、東大寺・興福寺などの大寺は絶大な力を持っており、その「威容」を親通の眼前に見せ付けていたでしょう。しかし、南都巡礼があと40年遅れていたら、おそらく親通のこの私記は存在しなかったかも知れませんね。皆さんも良くご存知の、平重衡による「南都焼き討ち」によりすべての堂宇は灰燼に帰していたからです。

「七大寺」の選定(?)に当たりちょっと迷ったことがありました。皆さん既にお気付きかも知れませんが、訪問先に「元興寺」が入っていません。元興寺の本堂は「国宝」の極楽堂で、禅室には「飛鳥寺」ゆかりの瓦や柱が遺っており近年注目を浴びている寺です。ただ、そうすると「八大寺?」、あるいは「斑鳩」にある「法隆寺」をはずす?「法隆寺」にはまほろば会で過去に数回訪問していますが、今回の見学旅行は「まほろば会発会40周年記念事業」でもありますので、「法隆寺ははずせない!」というのが幹事の大半の意見でした。結局元興寺をはずして法隆寺を残す選択をしました。勝手選定をどうぞお許しください。

以上

(文責;天野静一郎)

西大寺



東塔跡越しに望む本堂（重要文化財）

金銅透彫舎利容器（国宝）

西大寺（さいだいじ）は、奈良県奈良市西大寺芝町にある真言律宗総本山の寺院。奈良時代に孝謙上皇（重祚して称徳天皇）の発願により、僧・常騰を開山（初代住職）として建立された。南都七大寺の１つとして奈良時代には壮大な伽藍を誇ったが、平安時代に一時衰退し、鎌倉時代に叡尊によって復興された。山号は勝宝山。現在の本尊は釈迦如来である。

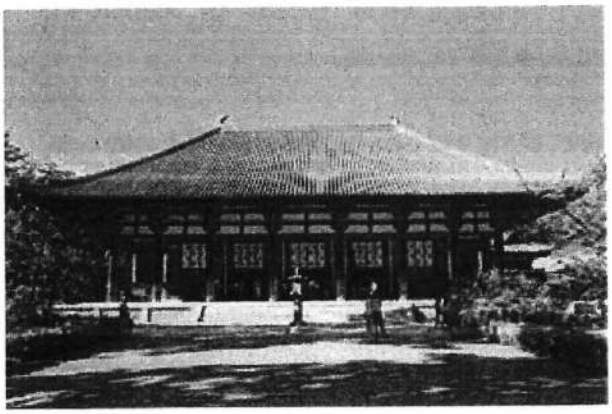
宝亀 11 年（780 年）の『西大寺資財流記帳』によれば、創建の経緯は以下のとおりである。天平宝字 8 年（764 年）9 月、孝謙上皇は恵美押勝の乱平定を祈願して金銅四天王像の造立を発願した。なお、孝謙上皇は同年 10 月重祚している（称徳天皇）。翌天平神護元年（765 年）、前述の四天王像が造立され、西大寺が創建された。この四天王像 4 体は西大寺四王堂に今も安置されるが、各像が足元に踏みつける邪鬼だけが創建当時のもので、像本体は後世の作に代わっている。西大寺の創建当時は僧・道鏡が中央政界で大きな力をもっており、西大寺の建立にあたっても道鏡の思想的影響が大きかったものと推定されている。護国のために四天王像を安置するのは、「金光明最勝王経」に基づくものである。

「西大寺」の寺名は言うまでもなく、大仏で有名な「東大寺」に対するもので、奈良時代には薬師金堂、弥勒金堂、四王堂、十一面堂、東西の五重塔などが立ち並ぶ壮大な伽藍を持ち、南都七大寺の１つに数えられる大寺院であった。前述の『資財流記帳』の記載や、元禄 11 年（1698 年）作成の伽藍絵図から復元される伽藍配置は以下のようなものである。寺域の中心には薬師金堂が建ち、その背後、通常の寺院では講堂のある位置には弥勒金堂が建っていた。これら中心伽藍の東には小塔院、その北に食堂院（じきどういん）、中心伽藍の西には正倉院、その北に政所院（まんどころいん）があった。中心伽藍の前方（南）には東西 2 基の五重塔が建ち、これらの東に四王院、西に十一面堂院があり、四王院の南に東南角院（すみいん）、十一面堂院の南に西南角院があった。塔は八角形で計画されたが、途中で四角形に改められたという。『資財流記帳』によれば、これらの諸堂には、密教系の像を含む、多数の仏像が安置され、多くの鏡で荘厳されていた。薬師金堂には、薬師三尊像を中心に計 21 体の仏像が安置され、中には密教系の孔雀明王像も含まれていた。弥勒金堂には計 77 体もの仏像が安置され、弥勒仏の兜率天浄土を表現していた。しかし、寺は平安時代に入って衰退し、火災や台風で多くの堂塔が失われ、興福寺の支配下に入っていた。

西大寺の中興の祖となったのは鎌倉時代の僧・叡尊(興正菩薩、1201～1290)である。叡尊は建仁元年(1201 年)、大和国添上郡(現・大和郡山市)に生まれた。11 歳の時から醍醐寺、高野山などで修行し、文暦 2 年(1235 年)、35 歳の時に初めて西大寺に住した。その後一時海龍王寺(奈良市法華寺町)に住した後、嘉禎 4 年(1238 年)西大寺に戻り、90 歳で没するまで 50 年以上、荒廃していた西大寺の復興に尽くした。叡尊は、当時の日本仏教の腐敗・堕落した状況を憂い、戒律の復興に努めた。また、貧者、病者などの救済に奔走し、今日で言う社会福祉事業にも力を尽くした。西大寺に現存する仏像、工芸品などには本尊釈迦如来像をはじめ、叡尊の時代に制作されたものが多い。その後も忍性などの高僧を輩出するとともに、荒廃した諸国の国分寺の再興に尽力し、南北朝時代の明徳 2 年(1391 年)に出された「西大寺末寺帳」には 8 か国、同時代のその他の史料から更に十数か国の国分寺が西大寺の末寺であったと推定されている(なお、現存の国分寺のうち、西大寺と関係を持つのは旧伊予国分寺のみであるが、他にも複数の国分寺が真言宗各派に属している)。

西大寺は室町時代の文亀 2 年(1502 年)の火災で大きな被害を受け、現在の伽藍はすべて江戸時代以降の再建である。なお、西大寺は 1895 年(明治 28 年)に真言宗から独立し、真言律宗を名乗っている。真言律宗に属する寺院は、大本山宝山寺(奈良県生駒市)のほか、京都・浄瑠璃寺、奈良・海龍王寺、奈良・不退寺、鎌倉・極楽寺、横浜・称名寺などがある。

唐招提寺



金堂

鑑真和尚像

唐招提寺(とうしょうだいじ)は、奈良市五条町にある鑑真が建立した寺院。南都六宗の 1 つである律宗の総本山である。本尊は盧舎那仏、開基(創立者)は鑑真である。井上靖の小説『天平の甍』で広く知られるようになった中国・唐出身の僧鑑真が晩年を過ごした寺であり、奈良時代建立の金堂、講堂を始め、多くの文化財を有する。唐招提寺は 1998 年に古都奈良の文化財の一部として、ユネスコより世界遺産に登録されている。『続日本紀』等によれば、唐招提寺は唐僧・鑑真が天平宝字 3 年(759 年)、新田部親王(天武天皇第 7 皇子)の旧宅跡を朝廷から譲り受け、寺としたものである。寺名の「招提」は、サンスクリット由来の中国語で、元来は「四方」「広い」などの意味を表す語であったが、「寺」「院」「精舎」「蘭若」などと同様、仏教寺院(私寺)を指す一般名詞として使われていた。つまり、唐招提寺という寺号は、「唐僧鑑真和尚のための寺」という意味合いである。

鑑真(688 年 － 763 年)の生涯については、日本に同行した弟子の思託が記した『大和尚伝』、それを基にした淡海三船の『唐大和尚東征伝』、寺に伝わる絵巻物『東征絵伝』、井上靖の『天平の甍』などに詳しい。

鑑真は仏教者に戒律を授ける「導師」「伝戒の師」として日本に招請された。「戒律」とは、仏教教団の構成員が日常生活上守るべき「規範」「きまり」を意味し、一般の仏教信者に授ける「菩薩戒」と、正式の僧に授ける「具足戒」とがある。出家者が正式の僧となるためには、「戒壇」という場で、「三師七証」という授戒の師3人と、証明師(授戒の儀式に立会い見届ける役の高僧)7人のもと、「具足戒」を受けねばならないが、当時(8世紀前半)の日本ではこうした正式の授戒の制度は整備されておらず、授戒資格のある僧も不足していた。そのため、官の承認を経ず、私的に出家得度する私度僧が増え、課役免除のために私度僧となる者もいて、社会秩序の乱れにつながっていた。

こうした中、天平5年(733年)、遣唐使と共に渡唐した普照と栄叡という留学僧がいた。彼らが揚州(現・江蘇省)の大明寺で高僧鑑真に初めて会ったのは西暦742年10月のことであった。普照と栄叡は、日本には正式の伝戒の師がいないので、しかるべき高僧を推薦いただきたいと鑑真に申し出た。鑑真の弟子達は渡航の危険などを理由に渡日を拒んだ。弟子達の内に渡日の志をもつ者がいないことを知った鑑真は、自ら渡日することを決意する。しかし、当時の航海は命懸けであった上に、唐で既に高僧として名の高かった鑑真の出国には反対する勢力もあった。そのため、鑑真、普照、栄叡らの渡航計画は挫折の連続であった。ある時は船を出す前に関係者の密告で普照と栄叡が捕縛され、ある時は船が難破した。748年、5回目の渡航計画では嵐に遭って船が漂流し、中国最南端の海南島まで流されてしまった。陸路揚州へ戻る途中、それまで行動を共にしてきた栄叡が病死し、高弟の祥彦(しょうげん)も死去、鑑真自らは失明するという苦難を味わった。753年、6回目の渡航計画でようやく来日に成功するが、鑑真は当時既に66歳になっていた。遣唐使船に同乗し、琉球を経て天平勝宝5年(753年)12月、薩摩に上陸した鑑真は、翌天平勝宝6年(754年)2月、ようやく難波津(大阪)に上陸した。同年4月、東大寺大仏殿前で、聖武太上天皇、光明皇太后、孝謙天皇らに菩薩戒を授け、沙弥、僧に具足戒を授けた。鑑真は日本で過ごした晩年の10年間の内、前半5年間を東大寺唐禅院に住した後、天平宝字3年(759年)、前述のように、今の唐招提寺の地を与えられた。大僧都に任じられ、後に大和尚の尊称を贈られた鑑真は、天平宝字7年(763年)5月、波乱の生涯を日本で閉じた。数え年76であった。

唐招提寺の寺地は平城京の右京五条二坊に位置した新田部親王邸跡地で、広さは4町であった。境内の発掘調査の結果、新田部親王邸と思われる前身建物跡が検出されている。また、境内から出土した古瓦の内、単純な幾何学文の瓦(重圏文軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせ)は、新田部親王邸のものと推定されている。寺内に現存する2棟の校倉造倉庫のうち、経蔵は新田部親王宅の倉庫を改造したものと思われるが、他に新田部親王時代の建物はない。

『招提寺建立縁起』(『諸寺縁起集』所収)に、寺内の建物の名称とそれらの建物は誰の造営によるものであるかが記されている。それによると、金堂は鑑真の弟子でともに来日した如宝の造営、食堂(じきどう)は藤原仲麻呂家の施入(寄進)、羂索堂(けんさくどう)は藤原清河家の施入であった。また、講堂は、平城宮の東朝集殿を移築改造したものであった。金堂の建立年代には諸説あるが、おおむね8世紀末と推定され、鑑真の没後に建立されたものである。

伽藍の造営は鑑真の弟子の如宝、孫弟子の豊安の代にまで引き継がれた。平安時代以後、一時衰退したが、鎌倉時代の僧・覚盛によって復興された。南大門(1960年の再建)を入ると正面に金堂(国宝)、その背後に講堂(国宝)がある。かつては南大門と金堂の間に中門があり、中門左右から回廊が出て金堂左右に達していた。金堂・講堂間の東西にはそれぞれ鼓楼(国宝)と鐘楼がある。講堂の東方には南北に長い東室(ひがしむろ、重要文化財)があるが、この建物の南側は礼堂(らいどう)と呼ばれている。講堂の西にあった西室、北にあった食堂(じきどう)は今は失われている。この他、境内西側には戒壇、北側には鑑真廟、御影堂、地蔵堂、中興堂、本坊、本願殿、東側には宝蔵(国宝)、経蔵(国宝)、新宝蔵、東塔跡などがある。

薬師寺

東塔(国宝)と西塔

薬師三尊像(手前から日光菩薩、薬師如来、月光菩薩)
写真は再建前の旧・金堂に安置されていた時のもの

薬師寺は天武天皇 9 年(680 年)、天武天皇の発願により、飛鳥の藤原京(奈良県橿原市城殿〈きどの〉町)の地に造営が開始され、平城遷都後の 8 世紀初めに現在地の西ノ京に移転したものである。ただし、飛鳥の薬師寺(本薬師寺)の伽藍も 10 世紀頃までは引き続き存続していたと見られる。

『日本書紀』天武天皇 9 年(680 年)11 月 12 日条には、天武天皇が後の持統天皇である鵜野讃良(うののさらら)皇后の病気平癒を祈願して薬師寺の建立を発願し、百僧を得度(出家)させたとある。薬師寺東塔の屋上にある相輪支柱に刻まれた「東塔擦銘」(とうとうさつめい、「さつ」は木扁に「察」)にも同趣旨の記述がある。しかし、天武天皇は寺の完成を見ずに朱鳥元年(686 年)没し、伽藍整備は持統天皇、文武天皇の代に引き継がれた。「東塔擦銘」には、「清原宮に天の下を統治した天皇(天武)の即位八年、庚辰の歳、中宮(後の持統天皇)の病気のため、この伽藍を創り始めたが、完成しないうちに崩御したので、その意志を継いで、太上天皇(持統)が完成したものである」という意味のことが記されている。ここでいう「天皇即位八年、庚辰之歳」は、『書紀』の「天武天皇 9 年」と同じ年を指している。すなわち、『書紀』は天智天皇の没した翌年(壬申年、西暦 672 年にあたる)を天武天皇元年とするが、天武が正式に即位したのはその翌年(西暦 673 年にあたる)であり、「天皇即位八年」とは即位の年から数えて 8 年目という意味である。

持統天皇 2 年(688 年)、薬師寺にて無遮大会(むしゃだいえ)という行事が行われたことが『書紀』に見え、この頃までにはある程度伽藍が整っていたものと思われる。『続日本紀』によれば、文武天皇 2 年(698 年)には寺の造営がほぼ完成し、僧を住まわせている。この創建薬師寺は、藤原京の右京八条三坊の地にあった。大和三山の畝傍山と香久山の中間にあたる橿原市城殿町に寺跡が残り、「本薬師寺(もとやくしじ)跡」として特別史跡に指定されている。

その後、和銅 3 年(710 年)の平城京への遷都に際して、薬師寺は飛鳥から平城京の六条大路に面した右京六条二坊(現在地)に移転した。移転の時期は長和 4 年(1015 年)成立の『薬師寺縁起』が伝えるところによれば養老 2 年(718 年)のことであった。ただし、平城薬師寺境内からは霊亀 2 年(716 年)の記載のある木簡が出土していることから、造営は養老 2 年よりも若干早くから始まっていたとみられる。『扶桑略記』天平 2 年(730 年)3 月 29 日条に、「始薬師寺東塔立」とあり、東塔(三重塔)が完成したのがその年のことで、その頃まで造営が続いていたものと思われる。なお、平城京への移転後も、飛鳥の薬師寺(本薬師寺)はしばらく存続していた。史料や発掘調査の結果からは平安時代中期、10 世紀ころまでは存続していたようだが、後に廃寺となった。本薬師寺跡には金堂・東塔の礎石、西塔の心礎が残っている。本薬師寺の伽藍配置は「薬師寺式伽藍配置」と称されるもので、中央に金堂、その手前に中門、背後に講堂を配し、金堂の手前東西に塔を置く。そして、中門左右から出た回廊が講堂の左右に達し、金堂、東西両塔は回廊で囲まれている。この伽藍配置は平城薬師寺においても踏襲されている。本薬師寺、平城薬師寺双方の発掘調査により、両伽藍の建物の規模、位置関係などはほぼ等しく、本薬師寺の伽藍を平城薬師寺に再現しようとしたものであることがわかる。ただし、平城薬師寺では中門の規模が拡大され、回廊も幅が広げられている。

平城京の薬師寺は天禄 4 年(973 年)の火災と享禄元年(1528 年)の筒井順興の兵火で多くの建物を失った。現在、奈良時代の建物は東塔を残すのみである。天禄 4 年の火災では金堂、東塔、西塔は焼け残ったが、講堂、僧坊、南大門などが焼けた。発掘調査の結果、西僧坊の跡地からは僧たちが使用していたとみられる奈良時代や唐時代の陶磁器が多数出土しており、天禄 4 年の火災の際に棚から落ちて土中に埋もれたものとみられる。

平城京の薬師寺にある東塔及び本尊薬師三尊像が飛鳥の本薬師寺から移されたものか、平城京で新たにつくられたものかについては明治時代以来論争がある。21 世紀の現在では、東塔は平城京での新築とするのが、ほぼ通説となっているが、論争は完全に決着したわけではない。11 世紀成立の『薬師寺縁起』に引用される奈良時代の流記資財帳に「薬師寺には塔が 4 基あり、うち 2 基は本寺にある」という趣旨の記載があり、ある時期までは平城と飛鳥の両薬師寺にそれぞれ 2 基の塔があったと解釈されることから、足立康、町田甲一らはこれを非移建説の根拠の 1 つとしている。現存する東塔に、他所から解体移築した痕跡の見られないことからも、東塔については『扶桑略記』の記述どおり、平城移転後の天平 2 年(730 年)新築と見る説が通説となっている。ただし、平城薬師寺の境内からは本薬師寺から出土するのと同様の古い様式の瓦も出土しており、西塔は飛鳥からの移築だったとする説もある。発掘調査の結果、平城薬師寺の廻廊は当初単廊(柱が 2 列)として計画されたものが、途中で複廊(柱が 3 列、通路が 2 列)に設計変更されたことが判明している。このことから、当初は本薬師寺の建物を一部移築しようとしていたものを、途中で計画変更したのではないかとする説もある。金堂本尊薬師三尊像については、記述の「持統天皇 2 年(688 年)、薬師寺にて無遮大会(むしゃだいえ)が行われた」との記述(『書紀』)を重視し、この年までには造立されて、後に平城薬師寺に移されたとする説がある一方、主に様式や鋳造技法の面から平城移転後の新造とする説もあり、決着はついていない。

20 世紀半ばまでの薬師寺には、江戸時代後期仮再建(従来は 1600 年再建説や 1676 年再建説などもあった)の金堂、講堂が建ち、創建当時の伽藍をしのばせるものは焼け残った東塔だけであった。1960 年代以降、名物管長として知られた高田好胤(たかだこういん)が中心となって写経勧進による白鳳伽藍復興事業が進められ、1976 年に金堂が再建されたのをはじめ、西塔、中門、回廊の一部、大講堂などが次々と再建された。再建にあたっては、「鉄は持って数百年程度、木材(ヒノキ)は千年持つ。鉄を使うとその部分から腐食する。」と主張する宮大工の西岡常一と、「台風や地震、火災からの文化財保護の観点からも鉄筋コンクリート補強が望ましい。」と主張する竹島卓一(元名古屋工業大学)の意見が衝突した。結果、金堂の内陣は鉄筋コンクリートとし、西塔は鉄の使用を極力少なくし木材の乾燥収縮を考慮して東塔より約 30 センチ高くして再建された。なお、入母屋造だった旧金堂は現在興福寺の仮中金堂として移築され、寄棟造に改造され前部の庇が取り払われるなど、外観を大きく変えて現存している。

法　隆　寺

西院伽藍遠景

銅造釈迦三尊像（金堂）

法隆寺（ほうりゅうじ）は、奈良県生駒郡斑鳩町にある寺院。聖徳宗の総本山である。別名を斑鳩寺（いかるがでら）という。法隆寺は 7 世紀に創建され、古代寺院の姿を現在に伝える仏教施設であり、聖徳太子ゆかりの寺院である。創建は金堂薬師如来像光背銘、『上宮聖徳法王帝説』から推古 15 年（607 年）とされる。金堂、五重塔を中心とする西院伽藍と、夢殿を中心とした東院伽藍に分けられる。境内の広さは約 18 万 7 千平方メートルで、西院伽藍は現存する世界最古の木造建築物群である。法隆寺の建築物群は法起寺と共に、1993 年に「法隆寺地域の仏教建造物」としてユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録された。建造物以外にも、飛鳥・奈良時代の仏像、仏教工芸品など多数の文化財を有する。

法隆寺は、日本仏教興隆の祖である聖徳太子が創建したと伝えられる寺院である。聖徳太子の実在を疑う説も存在するが、その説においても聖徳太子のモデルとなった人物が斑鳩宮及び斑鳩寺を建てたことは史実であろうとしている。現存する法隆寺西院伽藍は聖徳太子在世時のものではなく、7 世紀後半 －8 世紀初の建立であることは定説となっており、この伽藍が建つ以前に焼失した前身寺院（いわゆる若草伽藍）が存在したことも発掘調査で確認されている。また、聖徳太子の斑鳩宮跡とされる法隆寺東院の地下からも前身建物の跡が検出されている。以上のことから、聖徳太子の実在・非実在によらず、7 世紀の早い時期、斑鳩の地に仏教寺院が営まれたことは史実と認められている。

通説によれば、推古天皇 9 年（601 年）、聖徳太子は斑鳩の地に斑鳩宮を建て、この近くに建てられたのが法隆寺であるとされる。金堂の「東の間」に安置される銅造薬師如来坐像（国宝）の光背銘には「用明天皇が自らの病気平癒のため伽藍建立を発願したが、用明天皇がほどなく亡くなったため、遺志を継いだ推古天皇と聖徳太子があらためて推古天皇 15 年（607 年）、像と寺を完成した」という趣旨の記述がある。しかし、正史である『日本書紀』には（後述の 670 年の火災の記事はあるが）法隆寺の創建については何も書かれていない。

前述の金堂薬師如来像については

- 像自体の様式や鋳造技法の面から、実際の製作は 7 世紀後半に下るとみられること
- 607 年当時、日本における薬師如来信仰の存在が疑問視されること
- 銘文中の用語に疑問がもたれること

という理由から、文字通り 607 年まで遡る製作とは見なされていない。また、金堂の中央に安置される本尊は「623 年に聖徳太子の冥福のため止利が造った」という内容の光背銘をもつ釈迦三尊像であり、これより古い薬師如来像が「東の間」に安置されて脇仏のような扱いをされている点も不審である。このように、若干の不明点は残るものの、法隆寺の創建が 7 世紀前半の聖徳太子在世時に遡ることは、発掘調査の結果等からも明らかである。皇極天皇 2 年(643 年)、蘇我入鹿が山背大兄王を襲った際に斑鳩宮は焼失したが、法隆寺はこの時は無事だったと考えられる。

日本書紀巻 27 に「夏四月癸卯朔壬申 夜半之後 災法隆寺 一屋無餘」(天智天皇 9 年・670 年に法隆寺は一屋余すところなく焼失した)という記事がある。この記事の真偽をめぐって、現存する法隆寺西院伽藍は聖徳太子創建時のものであるとする説と、670 年に全焼した後、再建したものであるとする説とが鋭く対立し、いわゆる「再建・非再建論争」が起きた(くわしくは後述)。なお、発掘調査や建築用材の伐採年代の科学的調査などの裏付けから、現存する法隆寺西院伽藍は一度焼失した後に再建されたものであるということは定説となっている。ただし、皇極天皇 2 年(643 年)の上宮王家(聖徳太子の家)滅亡後、誰が西院伽藍を再建したのかなど、再建の正確な時期や経緯については謎も多い。焼失前の旧伽藍(いわゆる「若草伽藍」)は、現存の西院伽藍の位置ではなく、かなり南東寄りに位置していた。また、現存の西院伽藍がほぼ南北方向の中軸線に沿って建てられているのに対し、旧伽藍の中軸線はかなり北西方向に傾斜している。さらに、現・西院伽藍の建つ土地は、尾根を削り、両側の谷を埋めて整地したものであることがわかっており、なぜ、大規模な土木工事を行ってまで伽藍の位置や方位を変更したのかは定かでない。

再建時期についても明確な記録はないが、現存の西院伽藍の建築を見ると、細部の様式などから、金堂がもっとも年代が上がり、五重塔がそれに続き、中門、回廊はやや遅れての建築と見られる。『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、中門の仁王像や五重塔初層安置の塑造彫刻群は和銅 4 年(711 年)の製作とあり、この頃には西院伽藍全体が完成していたと考えられる。なお、平安時代に書かれた『七大寺年表』には和銅年間に法隆寺が建てられた、とある。一方、八角堂の夢殿を中心とする東院伽藍は、天平 10 年(738 年)ごろ、行信僧都が斑鳩宮の旧地に太子を偲んで建立したものである。

その後、聖徳太子の弟来目皇子の子孫と伝えられる登美氏の支配下に置かれていたが、平安時代初頭には登美氏からの自立への動きが強まった。この過程で法隆寺側と登美氏との間で発生したのが、善愷訴訟事件である。

延長 3 年(925 年)には西院伽藍のうち大講堂、鐘楼が焼失し、大講堂が再建されたのは数十年後の正暦元年(990 年)のことであった。以後、永享 7 年(1435 年)に南大門が焼失するなど、何度かの火災に遭ってはいるが、全山を焼失するような大火災には遭っておらず、建築、仏像をはじめ各時代の多くの文化財を今日に伝えている。

近世に入って、慶長年間(17 世紀初頭)には豊臣秀頼によって、元禄 － 宝永年間(17 世紀末～18 世紀初頭)には江戸幕府 5 代将軍徳川綱吉の生母桂昌院によって伽藍の修造が行われた。

近代に入ると、廃仏毀釈の影響で寺の維持が困難となり、1878年(明治11年)には管長千早定朝の決断で、聖徳太子画像(唐本御影)をはじめとする300件余の宝物を当時の皇室に献納し、金一万円を下賜された。これらの宝物は「法隆寺献納宝物」と呼ばれ、その大部分は東京国立博物館の法隆寺宝物館に保管されている。

1934年(昭和9年)から「昭和の大修理」が開始され、金堂、五重塔をはじめとする諸堂宇の修理が行われた。「昭和の大修理」は第二次世界大戦を挿んで半世紀あまり続き、1985年(昭和60年)に至ってようやく完成記念法要が行われた。この間、1949年(昭和24年)には修理解体中の金堂において火災が発生し、金堂初層内部の柱と壁画を焼損した。このことがきっかけとなって、文化財保護法が制定されたことはよく知られる。昭和の大修理の際に裏山に築堤(ちくてい)して貯水池を建設、そこから境内に地下配管して自然水利による消火栓を建設した。1949年(昭和24年)金堂火災の際、初期消火に活用された。1950年(昭和25年)に法相宗から独立した。1981年(昭和56年)からは「昭和資財帳調査」として、寺内の膨大な文化財の再調査が実施され、多くの新発見があった。調査の成果は『法隆寺の至宝ー昭和資財帳』として小学館から刊行されている。

法隆寺ではこの寺は聖徳太子創建のままであるという伝承を持っていた。しかし、明治時代の歴史学者は『日本書紀』の天智天皇9年(670年)法隆寺焼失の記述からこれに疑問を持ち、再建説を取った。これに対して建築史の立場から反論が行われ、歴史界を二分する論争が起こった。再建派の主要な論者は黒川真頼、小杉榲邨(こすぎすぎむら)、喜田貞吉ら、非再建派は建築史の関野貞、美術史の平子鐸嶺(ひらこたくれい)らであった。

非再建論の主張

- 法隆寺の建築様式は他に見られない独特なもので、古風な様式を伝えている。薬師寺・唐招提寺などの建築が唐の建築の影響を受けているのに対し、法隆寺は朝鮮半島三国時代や、隋の建築の影響を受けている。
- 薬師寺などに使われている基準寸法は(645年の大化の改新で定められた)唐尺であるが、法隆寺に使われているのはそれより古い高麗尺である。
- 日本書紀の焼失の記事は年代が誤っており、推古時代の火災の記事を誤って伝えたものであろう。など

再建論の主張

- 日本書紀の記事は正確である。
- 飛鳥時代の様式や高麗尺が使われているといっても建設年代の決定的な証拠にはならない。
- 書物に載っている法隆寺の場所と現在の場所が違う。など

論争の過程で、もともと二伽藍併存並存していたものが片方の伽藍が消失したという説(関野、足立康)も提出された。

非再建論の主な論拠は建築史上の様式論であり、関野貞の「一つの時代には一つの様式が対応する」という信念が基底にあった。一方、再建論の論拠は文献であり、喜田貞吉は「文献を否定しては歴史学が成立しない」と主張した。論争は長期に及びなかなか決着を見なかったが、1939年(昭和14年)、聖徳太子当時のものであると考えられる前身の伽藍、四天王寺式伽藍配置のいわゆる「若草伽藍」の遺構が発掘されたことで、再建であることがほぼ確定した。また「昭和の大修理」で明らかになった新事実(現在の法隆寺に礎石が転用されたものであること、金堂天井に残されていた落書きの様式など)もそれを裏付けている。

2004 年 12 月、若草伽藍跡の西側で、7 世紀初頭に描かれたと思われる壁画片約 60 点の出土が発表された。この破片は 1000 度以上の高温にさらされており、建物の内部にあった壁画さえも焼けた大規模な火事であったと推察される。壁と共に出土した焼けた瓦は 7 世紀初頭の飛鳥様式であり、壁画の様式も線の描き方が現法隆寺のものより古風であるという。出土した場所は、当時深さ約 3m ほどの谷であったところで、焼け残った瓦礫としてここに捨てられたと見られている。実際に焼失を裏付ける考古遺物が多数発見された。

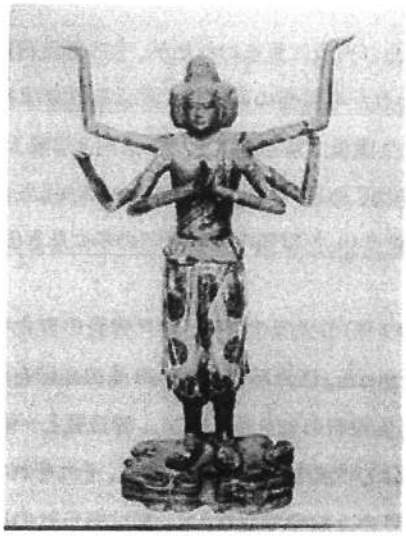
2004 年(平成 16 年)、奈良文化財研究所は、仏像が安置されている現在の金堂の屋根裏に使われている木材の年輪を高精度デジタルカメラ(千百万画素)で撮影した。その画像から割り出した結果、建立した年年輪年代測定を発表した。それによると、法隆寺金堂、五重塔、中門に使用されたヒノキやスギの部材は 650 年代末から 690 年代末に伐採されたものであるとされ、法隆寺西院伽藍は 7 世紀後半の再建であることがあらためて裏付けられた。問題は、金堂の部材が年輪年代からみて 650 年代末から 669 年までの間の伐採で、日本書紀の伝える法隆寺炎上の年である 670 年よりも前の伐採と見られることである。伐採年が日本書紀における法隆寺の焼失の年(670 年)を遡ることは、若草伽藍が焼失する以前に現在の伽藍の建築計画が存在した可能性をも示唆するものであるが、これについては、若草伽藍と現在の伽藍の敷地があまり重なり合っていないことから、現在の伽藍は若草伽藍が存在している時期に建設が開始されたのではないかと考える研究者も存在する。

なお、五重塔の心柱の用材は年輪年代測定によって確認できる最も外側の年輪が 594 年のものであり、この年が伐採年にきわめて近いと発表されている。他の部材に比べてなぜ心柱材のみが特に古いのかという疑問が残った。心柱材については、聖徳太子創建時の旧材を転用したとも考えられている。また、川端俊一郎は法隆寺の物差しは高麗尺ではなく、中国南朝尺の「材」であるとしている。

1972 年(昭和 47 年)に梅原猛が発表した論考『隠された十字架』は、西院伽藍の中門が 4 間で中央に柱が立っているという特異な構造に注目し、出雲大社との類似性を指摘して、再建された法隆寺は王権によって子孫を抹殺された聖徳太子の怨霊を封じるための寺なのではないかとの説を主張したが、歴史学の研究者のあいだでは、一般的な怨霊信仰の成立が奈良時代末期であることなどを指摘し、概ね梅原説には批判的であった。とはいえ、本書が与えた影響は大きなものがあり、山岸涼子は本書に直接のインスピレーションを得て『日出処の天子』を発表したという。また建築家の武澤秀一は、中門の中心にある柱が怨霊封じのためであるという梅原の説は退けつつも、梅原の問題提起を高く評価し、イーフー・トゥアンなど現象学的空間論を援用しながら、法隆寺西院伽藍の空間設計が、それ以前の四天王寺様式が持つ圧迫感を和らげるために考案されたものであり、先行する百済大寺(武澤は吉備池廃寺を百済大寺に比定して論を展開している)や川原寺で試みられた「四天王寺様式を横にした」空間構築の完成形であったのではないかと論じている。

興福寺

五重塔と東金堂（共に国宝）



阿修羅像（八部衆像のうち）

興福寺（こうふくじ）は、奈良県奈良市登大路町（のぼりおおじちょう）にある、南都六宗の一つ、法相宗の大本山の寺院である。南都七大寺の一つに数えられる。藤原氏の祖・藤原鎌足とその子息・藤原不比等ゆかりの寺院で、藤原氏の氏寺であり、古代から中世にかけて強大な勢力を誇った。南円堂は西国三十三所第9番札所である。「古都奈良の文化財」の一部として世界遺産に登録されている。

藤原鎌足夫人の鏡大王が夫の病気平癒を願い、鎌足発願の釈迦三尊像を本尊として、天智天皇8年（669年）山背国山階（現京都府京都市山科区）に創建した山階寺（やましなでら）が当寺の起源である。壬申の乱のあった天武天皇元年（672年）、山階寺は藤原京に移り、地名の高市郡厩坂をとって厩坂寺（うまやさかでら）と称した。和銅3年（710年）の平城遷都に際し、鎌足の子不比等は厩坂寺を平城京左京の現在地に移転し「興福寺」と名付けた。この710年が実質的な興福寺の創建年といえる。中金堂の建築は平城遷都後まもなく開始されたものと見られる。その後も、天皇や皇后、また藤原家によって堂塔が建てられ整備が進められた。不比等が没した養老4年（720年）には「造興福寺仏殿司」という役所が設けられ、元来、藤原氏の私寺である興福寺の造営は国家の手で進められるようになった。

興福寺は奈良時代には四大寺、平安時代には七大寺の一つに数えられ、特に摂関家藤原北家との関係が深かったために手厚く保護された。平安時代には春日社の実権をもち、大和国一国の荘園のほとんどを領して事実上の同国の国主となった。その勢力の強大さは、比叡山延暦寺とともに「南都北嶺」と称された。寺の周辺には塔頭と称する多くの付属寺院が建てられ、最盛期には百か院以上を数えたが、中でも天禄元年（970年）定昭の創立した一乗院と寛治元年（1087年）隆禅の創立した大乗院は皇族・摂関家の子弟が入寺する門跡寺院として栄えた。

鎌倉・室町時代の武士の時代になっても大和武士と僧兵等を擁し強大な力を持っていたため、幕府は守護を置くことができなかった。よって大和国は実質的に興福寺の支配下にあり続けた。安土桃山時代に至って織豊政権に屈し、文禄4年(1595年)の検地では、春日社興福寺合体の知行として2万1000余石とされた。

興福寺は、創建以来たびたび火災に見まわれたが、その都度再建を繰り返してきた。中でも治承4年(1180年)、治承・寿永の乱(源平合戦)の最中に行われた平重衡の南都焼討による被害は甚大で、東大寺とともに大半の伽藍が焼失した。この時、興福寺再興に奔走したのは焼失直後に別当職に就いた信円と解脱上人貞慶であった。現存の興福寺の建物はすべてこの火災以後のものである。なお仏像をはじめとする寺宝類も多数が焼失したため、現存するものはこの火災以後の鎌倉復興期に制作されたものが多い。興福寺を拠点とした運慶ら慶派仏師の手になる仏像もこの時期に数多く作られている。

江戸時代の享保2年(1717年)の火災の時は、時代背景の変化もあって大規模な復興はなされず、この時焼けた西金堂、講堂、南大門などは再建されなかった。江戸時代は21000石の朱印を与えられ保護された興福寺だが、慶応4年(1868年)に出された神仏分離令は、全国に廃仏毀釈の嵐を巻き起こし、春日社と一体の信仰が行われていた興福寺は大きな打撃をこうむった。興福寺別当だった一乗院および大乗院の門主は還俗し、それぞれ水谷川家、松園家と名乗った(奈良華族)。子院はすべて廃止、寺領は1871年(明治4年)の上知令で没収され、僧は春日社の神職となった。境内は塀が取り払われ、樹木が植えられて、奈良公園の一部となってしまった。一乗院跡は現在の奈良地方裁判所、大乗院跡は奈良ホテルとなっている。一時は廃寺同然となり、五重塔、三重塔さえ売りに出る始末だった。五重塔は250円(値段には諸説ある)で買い手がつき、買主は塔自体は燃やして金目の金具類だけを取り出そうとしたが、延焼を心配する近隣住民の反対で火を付けるのは取りやめになったという。ただし、五重塔が焼かれなかった理由はそれだけでなく、塔を残しておいた方が観光客の誘致に有利だという意見もあったという。行き過ぎた廃仏政策が反省されだした1881年(明治14年)、ようやく興福寺の再興が許可された。1897年(明治30年)、文化財保護法の前身である「古社寺保存法」が公布されると、興福寺の諸堂塔も修理が行われ、徐々に寺観が整備されて現代に至っている。しかし、寺に塀が無く公園の中に寺院がある状態、所謂「信仰の動線」が欠落していると称される状態は、この時の名残である。

1998年に世界遺産に登録され、1999年から日本国の史跡整備保存事業として、発掘調査が進められている。平城京での創建1300年を期に中金堂が再建中であり、南大門の再建も計画されている。

かつて興福寺には「興福寺両門跡」と呼ばれる2つの子院があった。一乗院と大乗院である。一乗院は、第6代門主覚信が関白藤原師実の子息だったことをきっかけに、代々、摂家あるいは皇族が門主を務める門跡寺院のひとつとなった。その後、五摂家分立以降は近衛家の管領するところとなり、近衛家流(近衛家・鷹司家)の子弟が門主となる例が多かった。ちなみに足利義昭は、もともと近衛稙家の猶子として法名覚慶を名乗り一乗院の門跡となっていたが、兄義輝の殺害にともない還俗し、織田信長の援助を得て将軍となったものである。大和の国衆でのちに戦国大名化した筒井氏は一乗院の衆徒の筆頭であった。江戸時代に入って後陽成天皇の皇子尊覚が門主となったのをきっかけに親王が門主をつとめるケースも増えた。たとえば、久邇宮朝彦親王は、もと一乗院の門主であったものが、その後青蓮院に移されたものである。摂家や親王家と同様に諸大夫以下の専属の家司もおり、摂家・親王家と同格の立場を誇っていた。また奈良だけではなく、京都今出川の桂宮邸と御所の間に「里坊」と呼ばれる屋敷を持っていた。大乗院は、これも藤原師実の子息である尋範が門主となったのをきっかけに門跡寺院となった。こちらは九条家の管領に属し、九条流(九条家・二条家・一条家)の子弟が門主を務めるところであった。戦国時代には、日記『大乗院寺社雑事記』で著名な門主尋尊(一条兼良の子息)が出ている。また、足利義昭が将軍の地位を追われたあと、義昭のひとり息子が

出家して法名を義尋と名乗り大乗院の門主となっている。一乗院が筒井氏を衆徒としたように、大乗院も古市氏を衆徒としている。諸大夫以下の家司や里坊を有し、摂家・親王家と同様の格式を誇ったことは一乗院と同様であるが、親王が門主となった例はない。興福寺の最高職である別当は、一乗院門主と大乗院門主が交互に就任するならわしだった。ただし、平家による南都焼き討ち直後の時期に第 44 代別当となった信円[i]に限っては、例外的に一条院門跡と大乗院門跡の双方を、他の幾つかの院家と共に兼帯している。また、両門跡に属する門主以外の者が別当に就任した例もある。また、興福寺がその権限を行使していた大和国守護職について、別当が権限を有していた説、両院の門主が共同で権限を行使していたとする説、門主が別当の時は別当が全権を行使しそれ以外の者が別当の時は別当と両院が共同で権限を行使していたとする説がある。江戸時代には世俗的権力を失い、幕府から一定の知行(一乗院が 1,492 石、大乗院が 951 石)を与えられた単なる寺院となった。両院とも明治の廃仏毀釈で廃寺となった。

東大寺

大仏殿

盧舎那仏像(大仏)西側より

東大寺(とうだいじ)は、奈良県奈良市雑司町にある華厳宗大本山の寺院である。金光明四天王護国之寺(きんこうみょうしてんのうごこくのてら)ともいい、奈良時代(8 世紀)に聖武天皇が国力を尽くして建立した寺である。「奈良の大仏」として知られる盧舎那仏(るしゃなぶつ)を本尊とし、開山(初代別当)は良弁である。現別当(住職・221 世)は、筒井寛昭。奈良時代には中心堂宇の大仏殿(金堂)のほか、東西 2 つの七重塔(推定高さ約 70 メートル以上)を含む大伽藍が整備されたが、中世以降、2 度の兵火で多くの建物を焼失した。

現存する大仏は、台座（蓮華座）などの一部に当初の部分を残すのみであり、現存する大仏殿は江戸時代の 18 世紀初頭（元禄時代）の再建で、創建当時の堂に比べ、間口が 3 分の 2 に縮小されている。「大仏さん」の寺として、古代から現代に至るまで広い信仰を集め、日本の文化に多大な影響を与えてきた寺院であり、聖武天皇が当時の日本の 60 余か国に建立させた国分寺の中心をなす「総国分寺」と位置付けられた。東大寺は 1998 年に古都奈良の文化財の一部として、ユネスコより世界遺産に登録されている。

8 世紀前半には大仏殿の東方、若草山麓に前身寺院が建てられていた。東大寺の記録である『東大寺要録』によれば、天平 5 年（733 年）、若草山麓に創建された金鐘寺（または金鍾寺（こんしゅじ））が東大寺の起源であるとされる。一方、正史『続日本紀』によれば、神亀 5 年（728 年）、第 45 代の天皇である聖武天皇と光明皇后が幼くして亡くなった皇子の菩提のため、若草山麓に「山房」を設け、9 人の僧を住まわせたことが知られ、これが金鐘寺の前身と見られる。金鐘寺には、8 世紀半ばには羂索堂、千手堂が存在したことが記録から知られ、このうち羂索堂は現在の法華堂（＝三月堂、本尊は不空羂索観音）を指すと見られる。天平 13 年（741 年）には国分寺建立の詔が発せられ、これを受けて翌天平 14 年（742 年）、金鐘寺は大和国の国分寺と定められ、寺名は金光明寺と改められた。

大仏の鋳造が始まったのは天平 19 年（747 年）で、このころから「東大寺」の寺号が用いられるようになったと思われる。なお、東大寺建設のための役所である「造東大寺司」が史料に見えるのは天平 20 年（748 年）が最初である。聖武天皇が大仏造立の詔を発したのはそれより前の天平 15 年（743 年）である。当時、都は恭仁京（現・京都府木津川市）に移されていたが、天皇は恭仁京の北東に位置する紫香楽宮（現・滋賀県甲賀市信楽町）におり、大仏造立もここで始められた。聖武天皇は短期間に遷都を繰り返したが、2 年後の天平 17 年（745 年）、都が平城京に戻ると共に大仏造立も現在の東大寺の地で改めて行われることになった。この大事業を推進するには幅広い民衆の支持が必要であったため、朝廷から弾圧されていた行基を大僧正として迎え、協力を得た。難工事の末、大仏の鋳造が終了し、天竺（インド）出身の僧・菩提僊那を導師として大仏開眼会（かいげんえ）が挙行されたのは天平勝宝 4 年（752 年）のことであった。そして、大仏鋳造が終わってから大仏殿の建設工事が始められて、竣工したのは天平宝字 2 年（758 年）のことであった。東大寺では大仏創建に力のあった良弁、聖武天皇、行基、菩提僊那を「四聖（ししょう）」と呼んでいる。

大仏造立・大仏殿建立のような大規模な建設工事は国費を浪費させ、日本の財政事情を悪化させるという、聖武天皇の思惑とは程遠い事実を突き付けた。実際に、貴族や寺院が富み栄える一方、農民層の負担が激増し、平城京内では浮浪者や餓死者が後を絶たず、租庸調の税制も崩壊寸前になる地方も出るなど、律令政治の大きな矛盾点を浮き彫りにした。天平勝宝 8 年（756 年）5 月 2 日、聖武太上天皇が崩御する。その年の 7 月に起こったのが、橘奈良麻呂の乱である。7 月 4 日に逮捕された橘奈良麻呂は、藤原永手の聴取に対して「東大寺などを造営し人民が辛苦している。政治が無道だから反乱を企てた」と謀反を白状した。ここで、永手は、「そもそも東大寺の建立が始まったのは、そなたの父（橘諸兄）の時代である。その口でとやかく言われる筋合いは無いし、それ以前にそなたとは何の因果もないはずだ。」と反論したため、奈良麻呂は返答に詰まったという。

奈良時代の東大寺の伽藍は、南大門、中門、金堂（大仏殿）、講堂が南北方向に一直線に並び、講堂の北側には東・北・西に「コ」の字形に並ぶ僧房（僧の居所）、僧房の東には食堂（じきどう）があり、南大門 － 中門間の左右には東西 2 基の七重塔（高さ約 70 メートル以上と推定される）が回廊に囲まれて建っていた。天平 17 年（745 年）の起工から、伽藍が一通り完成するまでには 40 年近い時間を要している。

奈良時代のいわゆる南都六宗(華厳宗、法相宗、律宗、三論宗、成実宗、倶舎宗)は「宗派」というよりは「学派」に近いもので、日本仏教で「宗派」という概念が確立したのは中世以後のことである。そのため、寺院では複数の宗派を兼学することが普通であった。東大寺の場合、近代以降は所属宗派を明示する必要から華厳宗を名乗るが、奈良時代には「六宗兼学の寺」とされ、大仏殿内には各宗の経論を納めた「六宗厨子」があった。平安時代には空海によって寺内に真言院が開かれ、空海が伝えた真言宗、最澄が伝えた天台宗をも加えて「八宗兼学の寺」とされた。

また、平安時代に入ると、桓武天皇の南都仏教抑圧策により「造東大寺所」が廃止されるなどの圧迫を受け、また講堂と三面僧房が失火で、西塔が落雷で焼失したり、暴風雨で南大門、鐘楼が倒壊したりといった事件が起こるが、後に皇族・貴族の崇敬を受けて黒田庄に代表される多数の荘園を寄進されたり、開発した。やがて、南都の有力権門として内外に知られるようになり、多数の僧兵を抱え、興福寺などと度々強訴を行っている。東大寺は、近隣の興福寺と共に治承4年12月28日(1181年1月15日)の平重衡の兵火で壊滅的な打撃(南都焼討)を受け、大仏殿を初めとする多くの堂塔を失った。この時、大勧進職に任命され、大仏や諸堂の再興に当たったのが当時61歳の僧・俊乗房重源(ちょうげん)であった。重源の精力的な活動により、文治元年(1185年)には後白河法皇らの列席のもと、大仏開眼法要が行われ、建久元年(1190年)には、再建大仏殿が完成、源頼朝らの列席のもと、落慶法要が営まれた。

その後、戦国時代の永禄10年10月10日(1567年11月10日)、三好・松永の戦いの兵火により、大仏殿を含む東大寺の主要堂塔はまたも焼失した。仮堂が建てられたが慶長15年(1610年)の暴風で倒壊し大仏は露座のまま放置された。その後の大仏の修理は元禄4年(1691年)に完成し、再建大仏殿は公慶(1648－1705年)の尽力や、江戸幕府将軍徳川綱吉や母の桂昌院を初め多くの人々による寄進が行われた結果、宝永6年(1709年)に完成した。この3代目の大仏殿(現存)は、高さと奥行きは天平時代とほぼ同じだが、間口は天平創建時の11間からおよそ3分の2の7間に縮小されている。また、講堂、食堂、東西の七重塔など中世以降はついに再建されることはなく、今は各建物跡に礎石や土壇のみが残されている。

東大寺大仏殿

東大寺大仏殿(とうだいじだいぶつでん)は、東大寺にある仏堂。東大寺の本尊、盧舎那仏坐像(奈良の大仏)を安置している。正式には東大寺金堂というが、「大仏殿」の名で広く知られ、東大寺の公式ホームページでも主に「大仏殿」が使用されている。現在の建物は1691年(元禄4年)に完成、1709年(宝永6年)に落慶したもので、日本の国宝に指定されている。

東大寺の伽藍の中央に位置し、境内で最大の建物である。現存する大仏殿は、正面の幅57.5m、奥行き50.5m、棟までの高さ49.1m。奥行きと高さは創建当時とほぼ同じだが、幅は創建当時(約86m)の約3分の2になっている。「東大寺要録」の「大仏殿碑文」によると創建時の大仏殿の規模は、幅29丈(約85.8m)、奥行き17丈(約50.3m)、高さ12丈6尺(約37m)、柱数84という。大仏殿の正面には、国宝に指定されている金銅八角燈籠がある。世界最大の木造建築として広く知られていたが、近代には集成材や構造用合板などの建築資材の発達によりティラムーク航空博物館や大館樹海ドームなど東大寺大仏殿より大きな木造建築が建造されている。木造軸組建築としては現在でも世界最大となっている。

最初の大仏殿の建設は大仏の鋳造が終わった後に始まり、758年(天平宝字2年)に完成した。1181年(治承4年)1月15日(旧暦12月28日)、平重衡などの南都焼討によって焼失。その後、1190年(建久元年)に再建され、落慶法要には源頼朝なども列席した。1567年(永禄10年)11月10日(旧暦10月10日)から11月11日(旧暦10月11日)にかけて、東大寺大仏殿の戦いによって焼失。『多聞院日記』には、穀屋から出火し、法花堂、回廊と燃え広がったのち、11月11日(旧暦10月11日)午前2時頃には大仏殿が完全に焼失したと考えられる。その後、仮の仏堂が建設されたが、1610年(慶長15年)の暴風で倒壊した。

さらにその後、公慶上人の尽力や、徳川綱吉配下の勘定奉行・荻原重秀などの寄進により、現存する大仏殿の建設が始まり、1691年(元禄4年)に完成、1709年(宝永6年)に落慶した。また、1879年(明治12年)から1915年(大正4年)までに修理が行われた。これは瓦の重量に屋根が耐えられなくなったためであり、やむなく瓦の数を減らすなどの対処が行われた。しかし雨漏りなどの問題が生じ、1973年(昭和48年)から1980年(昭和55年)に再修理が行われた。この際は現代の技術で軽量化された瓦が採用された。1952年(昭和27年)3月29日には国宝に指定された。

大安寺

本堂

大安寺(だいあんじ)は、奈良市中心部にある高野山真言宗の仏教寺院。本尊は十一面観音。開基(創立者)は聖徳太子と伝える。南都七大寺の1つで、奈良時代(平城京)から平安時代前半は東大寺、興福寺と並ぶ大寺であった。奈良時代の大安寺は東西2基の七重塔をはじめとする大伽藍を有し、東大寺、興福寺と並ぶ大寺院で、「南大寺」の別称があった。南都七大寺のなかでも、七重塔が建っていたのは東大寺と大安寺のみである。奈良時代の大安寺には、東大寺大仏開眼の導師を務めたインド僧・菩提僊那をはじめ歴史上著名な僧が在籍し、日本仏教史上重要な役割を果たした寺院であった。しかし、平安時代以後は徐々に衰退し、寛仁元年(1017年)の火災で主要堂塔を焼失して以後は、かつての隆盛を回復することはなかった。現存する大安寺の堂宇はいずれも近世末～近代の再建であり、規模も著しく縮小している。奈良時代にさかのぼる遺品としては、8世紀末頃の制作と思われる木彫仏9体が残るのみである。

大安寺の歴史については、正史『日本書紀』『続日本紀』の記述のほか、天平19年(747年)作成の「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」(だいあんじがらんえんぎ　ならびに　るきしざいちょう)が主なよりどころとなっている(「資材帳」の写本は奈良市・正暦寺旧蔵、国立歴史民俗博物館蔵)。

「資材帳」によれば、大安寺の起源は聖徳太子が今の奈良県大和郡山市に建てた熊凝精舎(くまごりしょうじゃ)であり、これが移転して、「百済大寺」(くだらのおおてら、くだらだいじ)、「高市大寺」(たけちのおおてら、たけちだいじ)、「大官大寺」(だいかんだいじ)と、移転と改称を繰り返し、平城京遷都とともに寺も新都へ移転して「大安寺」となったという。「資材帳」によれば、病床にあった聖徳太子は、見舞いに来た田村皇子(のちの舒明天皇)に、熊凝精舎を本格的な寺院にすべきことを告げ、太子の意思を受けた田村皇子が、即位後の舒明天皇 11 年(639 年)、百済川のほとりに建て始めたのが百済大寺であるという。初めての国家寺院である。熊凝精舎については、大和郡山市額田部(ぬかたべ)に現存する額安寺(額田寺)がその跡ともいわれる。石田茂作は「熊凝精舎 = 額田寺」説をとったが、福山敏男は、熊凝精舎を額田寺に当てる説は鎌倉時代の『聖徳太子伝私記』に初めてみえることなどから、熊凝精舎の実在自体を疑問視し、日本仏教興隆の祖とされる聖徳太子を創立者に仮託した伝承とみる。平安京に移ってからの大安寺の伽藍整備に力のあった僧・道慈が額田氏の出身であるところから、額田氏の氏寺である額田寺と関連づけられたのではないかとみられている。

一方の百済大寺については、奈良県北葛城郡広陵町に百済寺という寺が現存するものの、舒明天皇との関連は明確でなく、付近に天皇建立の寺院らしき寺跡の発見や古瓦の出土もない。1997 年、奈良国立文化財研究所(現・奈良文化財研究所)は、奈良県桜井市南西部(藤原宮跡の東方)にある吉備池廃寺跡が百済大寺跡と推定されるとの見解を発表した。その後 2002 年まで継続された発掘調査の結果、吉備池廃寺は東に金堂、西に塔が建つ法隆寺式伽藍配置の寺院であったことが明らかになり、発掘された古瓦の様式年代からもこの寺院が舒明天皇 11 年(639 年)に建立された百済大寺に該当する可能性は高いと見られている。

吉備池廃寺については、中心伽藍跡の北部が溜池になっていることもあり、講堂の跡などは確認されていないが、金堂、塔、東・西・南の回廊などの跡が確認されている。金堂跡には礎石は残っておらず、柱の配置は不明だが、基壇は東西が 37 メートル、南北が 25 メートルで、南側の張り出し部を含むと南北は 28 メートルとなる。塔の基壇は一辺 32 メートルの大規模なもので、規模からみて九重塔が建っていたとみられる。回廊の東西は外側柱間の距離で 156.2 メートルとなり、高麗尺の 440 尺に相当する。出土した瓦は、軒丸瓦が重圏単弁八弁蓮華文、軒平瓦が忍冬唐草文型押で、軒丸瓦・軒平瓦ともに、わずかにデザインの異なる 2 種類がある。このうち、軒丸瓦は四天王寺と海会寺で同笵瓦が使われているが、瓦面の傷などから判断して、四天王寺・海会寺よりも吉備池廃寺出土瓦の方が先行して製作されたとみられる。一方、軒平瓦は 2 種類のうちの 1 つは法隆寺の前身である若草伽藍で同笵瓦が使われているが、こちらは吉備池廃寺出土瓦よりも若草伽藍瓦の方が先行する。類似の瓦は山田寺でも使用されているが、山田寺出土瓦の方が様式的に後のものとみられる。以上のことから、吉備池廃寺の建立は、法隆寺の前身の若草伽藍より後で、641 年から建立の開始された山田寺よりは先行する、630 年代から 640 年代初めに位置付けられる。これは前述の百済大寺の建立が開始された年代と符合する。また、吉備池廃寺では建物の規模の大きさに比して瓦の出土量が少なく、金堂や塔の礎石は全く残っておらず、火災に遭った形跡もない。出土した瓦も前述の様式のもののみで、補修用の瓦などはみられない。以上のことは、この寺は創建からあまり時を隔てずに建物ごと別の場所に移転した可能性を示唆している。

『日本書紀』には、天武天皇 2 年(673 年)12 月 17 日に美濃王と紀訶多麻呂が造高市大寺司に任命されたとある。「大安寺資材帳」には、その同じ日に御野王(「みののおおきみ」で美濃王と同じ)と紀訶多麻呂が造寺司に任命され、このときに寺を百済の地から高市の地に移したとある。673 年は天武天皇(大海人皇子)が壬申の乱に勝利した翌年であり、同天皇の父舒明天皇の三十三回忌、母斉明天皇の十三回忌にあたることが指摘されている。資材帳にはさらに、天武天皇 6 年(677 年)9 月に高市大寺を改称して大官大寺としたと見える。

「資材帳」および『書紀』には、文武天皇（在位 697 - 707 年）の治世に至っても大官大寺の堂塔の造営が行われている状況が窺える。天武朝の大官大寺（高市大寺）と文武朝の大官大寺の関係については、1965 年に田村吉永が別寺説を唱えた。その後の発掘調査や研究の進展により、両者は別の場所に建っていた可能性が高いと考えられている。

大官大寺跡は奈良県明日香村小山に残り、国の史跡に指定されている。寺号の読みは『釈日本紀』に「だいくわんだいじ」とあり、「おほつかさのおほてら」という読みも付されている。文字通り、官立の大寺という意味である。寺跡の北には大和三山のうちの香久山、南には飛鳥浄御原宮跡が位置する。伽藍配置は中門、金堂、講堂が南北に一直線に並び、中門左右から出た回廊が金堂に達し、回廊で囲まれた方形の区画の東側（金堂の右手前）に塔が位置する一塔一金堂式であった。廻廊内の西側（金堂の左手前）には建物跡が検出されていない。東西の回廊はさらに北方に続き、講堂の背後で閉じていた。つまり、講堂の周囲は回廊で囲まれていた。塔は方 5 間（初層平面の 1 辺に柱が 6 本立ち、柱間が 5 間あるという意味）の大規模なもので、伝承のとおり九重塔であったと推定される。この地には堂跡と塔跡の土壇が残り、ここが大官大寺の跡であるという伝承は近世からあった。幕末から明治初期にかけて、岡本桃里という人物が寺跡を調査した際には、堂跡には 45 個の礎石、塔跡には心礎と 34 個の礎石が残っていたが、明治 22 年（1889 年）から始まった橿原神宮の造営工事のために礎石はあらかた持ち出されてしまった。なお、堂跡の土壇については、付近の小字名を「コードー」と言ったことから、講堂跡と見なされていたが、後年の発掘調査の結果、正しくは金堂跡であることが判明している。明治 37 年（1904 年）に本沢清三郎が調査した際には数個の礎石を残すのみであったが、礎石を抜き取った跡の穴は残っていた。本沢が作成した見取り図によると、堂は桁行 9 間、梁間 4 間、塔は方 5 間であった（「間」は長さの単位ではなく、柱間の数を意味する）。

昭和 48 年（1973 年）から同 57 年（1982 年）にかけて奈良国立文化財研究所の行った発掘調査によって、前述のような一塔一金堂式の伽藍配置であったことが確認され、金堂、塔、中門、回廊、講堂のほか、寺域を区切る掘立柱塀の存在も伽藍の東方・西方・北方で確認された。金堂の平面規模は桁行 9 間（45 メートル）、梁間 4 間（21 メートル）、塔は方 5 間（15 メートル）であった。飛鳥時代の他の大寺の金堂の平面が 15×11 メートル程度、塔が方 6.5 メートル程度であるのに比べると格段に大規模な伽藍である。寺域は藤原京の条坊に合わせて計画され、東が東四坊大路、西が東三坊大路、南が十条大路、北が九条条間路で囲まれた地区に位置していた。発掘に際し、寺域跡からは焼け土や焼けた瓦が検出された。屋根の垂木が焼け落ちて地面に突き刺さった痕跡を残している箇所もあり、中門、回廊などは、建設工事の足場跡の穴にも焼け跡がみられたことから、これらの建物は建設途上で火災に遭ったとみられる。以上のことから、この寺は、金堂などの主要建物がようやく完成し、中門、回廊などは工事中の段階で火災に遭ったことが判明した。さらに出土した土器や瓦（複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦）の編年から、この伽藍の建立は天武朝まではさかのぼらず、持統天皇の末年から文武天皇の初年頃（7 世紀最末期）であったことが推定された。以上のことから、前述の天武朝に建立された高市大寺とは年代が合わず、高市大寺と大官大寺とは別の位置にあったとする説が有力となっている。高市大寺の所在については不明であるが、香久山の西北、藤原宮の東にあった木之本廃寺が有力候補とされている。

飛鳥地方にあった 7 世紀建立の寺院のうち、法興寺（元興寺）、薬師寺、厩坂寺（うまやさかでら、後の興福寺）などは平城京への遷都とともに新都へ移転している。大官大寺も平城京左京六条四坊の地へ移転し、大安寺となった。平城京への移転の年次については正史『続日本紀』には記載がなく、いくつかの説があるが、霊亀 2 年（716 年）の移転とみるのが通説とされている。この説の根拠は、『続日本紀』の霊亀 2 年 5 月条に「元興寺を左京六条四坊へ移し建てる」という意味の記載があるが、この「元興寺」を「大官大寺」の誤記とするものである。なお、『扶桑略記』によれば飛鳥の大官大寺は和銅 4 年（711 年）すなわち遷都の翌年に火災に遭ったという。前述の大官大寺跡の発掘調査の結果からも、火災のあったことは確認されている。

平城京の街路は1町(約109メートル)ごとに碁盤目状に配され、4町ごとに走る東西路は一条大路、二条大路・・、南北路は一坊大路、二坊大路・・、と名付けられていた。大安寺の正門にあたる南大門は六条大路に面して建っていたが、寺域は六条大路の南側にも伸び、東西3町、南北5町に及ぶ広大なものであった。伽藍配置の特色は、東西両塔(七重塔)が金堂から大きく離れ、南大門の外側(南方)に建つことであり、「大安寺式伽藍配置」と称されている。

天平19年(747年)の「大安寺資材帳」によると、同年現在、大安寺には887名の僧が居住していた。奈良時代の大安寺には、インド僧・菩提僊那、唐に16年間滞在した留学僧・道慈など、帰化僧・留学僧を含む著名な僧が在籍していた。菩提僊那は東大寺大仏開眼の導師を務めた僧として知られる。道慈は三論宗系の学僧であり、奈良時代に護国経典として重視された新訳『金光明最勝王経』を日本にもたらすなど、上代仏教史上重要な人物である。唐僧・鑑真を日本へ招請するため唐に派遣された普照と栄叡、空海や最澄と交流のあった勤操、また最澄の師にあたる行表も大安寺の僧であり、大安寺が日本の上代仏教の発展に果たした役割は大きかったが、都が平安京へ移ると次第に衰退した。寛仁元年(1017年)の火災では本尊釈迦如来像と東塔を残してことごとく焼失し、以後、かつての規模を取り戻すことはなかった。慶長元年(1596年)の地震による損害の後、近世には小堂1つを残すのみであったという。

大安寺の旧本尊・乾漆造釈迦如来像は「資材帳」に天智天皇発願の像と記され、名作として知られていた。平安時代末期の保延6年(1140年)に南都の諸寺を巡った大江親通の『七大寺巡礼私記』は、薬師寺の本尊像(現存、国宝)についての記述のなかで、「薬師寺の本尊像は優れた作だが、大安寺の釈迦像には及ばない」という趣旨のことを述べている。平安時代末期に和様彫刻様式を完成させた仏師・定朝も大安寺の釈迦像を模作したことが知られている。この釈迦像も今は失われ、見ることができない。なお大安寺自身により、学術論文集『南都大安寺論叢』(南都国際仏教文化研究所編、平成7年・1995年)と、『大安寺史・史料』(昭和59年・1984年)が刊行されている。境内(国の史跡)には本堂、嘶堂(いななきどう)などが建つがいずれも近代の建物である。

大神神社

拝殿(重要文化財)

三輪山(神体山)と大鳥居

大神神社(おおみわじんじゃ)は、奈良県桜井市にある神社。式内社(名神大社)、大和国一宮、二十二社(中七社)の一社。旧社格は官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。別称として「三輪明神」、「三輪神社」とも呼ばれる。

日本で最古の神社の１つとされる。三輪山そのものを神体（神体山）としており、本殿をもたず、拝殿から三輪山自体を神体として仰ぎ見る古神道（原始神道）の形態を残している。自然を崇拝するアニミズムの特色が認められるため、三輪山信仰は縄文か弥生にまで遡ると想像されている。拝殿奥にある三ツ鳥居は、明神鳥居３つを１つに組み合わせた特異な形式のものである。

例年 11 月 14 日に行われる醸造安全祈願祭（酒まつり）で拝殿に杉玉が吊るされる、これが各地の造り酒屋へと伝わった。

摂社の檜原神社は天照大神をはじめて宮中の外に祀った「倭笠縫邑」の地であると伝えられ、元伊勢の一つとなっている。また、作者不詳の能「三輪」ではキリ（終りの部分）の歌に「思えば伊勢と三輪の神。一体分身の御事。今更、なんと、いわくら（磐座・言わくら）や」との言葉があり、伊勢神宮との関係が示唆されている。なお、全国各地に大神神社・神神社（美和神社）が分祀されていることについては、既に『延喜式神名帳』（『延喜式』巻 9・10 の神名式）にも記述がある。その分布は、山陽道に沿って播磨（美作）・備前・備中・周防に多い。吉備国を征服する時に大和王権によって分祀されたのではないかと推測されている。近年、大和七福八宝めぐり（三輪明神、長谷寺、信貴山朝護孫子寺、當麻寺中之坊、安倍文殊院、おふさ観音、談山神社、久米寺）の１つに数えられている。

主祭神は大物主大神（おおものぬしのおおかみ、倭大物主櫛甕玉命）。配神は大己貴神（おおなむちのかみ）・少彦名神（すくなひこなのかみ）。大物主神は蛇神であり水神または雷神としての性格を持ち稲作豊穣、疫病除け、酒造り（醸造）などの神として篤い信仰を集めている。また国の守護神（軍神）、氏族神（太田田根子の祖神）である一方で祟りなす強力な神（霊異なる神）ともされている。大物主神にまつわる伝承は多いが、その中には、当社の付近にある箸墓古墳と関連するものもある。記紀には、次の記述がある。大国主神（大己貴神）は出雲国を拠点に国造りに励んでいたが、協力者である少彦名神が常世国に去ったため思い悩んでいると、突如、海原を照らして神が出現した。その神は「吾はお前の奇魂幸魂である」といい、「吾は大和国、三輪山に住みたいと思う」といったという。その神が大物主神であるが、大物主神は大国主神の子孫であるという説もある。

崇神天皇 7 年に天皇が物部連の祖伊香色雄（いかがしこを）に命じ、三輪氏の祖である意富多多泥古（太田田根子）を祭祀主として大物主神を祀らせたのが始まりとされる。日本書紀では天皇が天変地異に加え疫病の流行に宸襟を悩まされているとき、夢枕に大物主神が立ち、「こは我が心ぞ。意富多多泥古（太田田根子）をもちて、我が御魂を祭らしむれば、神の気起こらず、国安らかに平らぎなむ」と告げたとされる。天皇は早速、太田田根子を捜し出し、三輪山において祭祀を行わせたところ、天変地異も疫病も収まったという。国史には奉幣や神階の昇進など当社に関する記事が多数あり、朝廷から厚く信仰されていたことがわかる。貞観元年（859 年）2 月、神階は最高位の正一位に達した。また、『延喜式神名帳』には「大和国城上郡 大神大物主神社 名神大 月次相嘗新嘗」と記載され、名神大社に列している。

奈良盆地の遺跡

纒向遺跡

●奈良県桜井市　まきむくいせき

奈良盆地の東南部、三輪山の北西を流れる巻向川によって形成された扇状地域にある纒向遺跡は、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落跡です。東西約二キロ、南北約一・五キロに及ぶ広大な地区から、居住地や大溝、祭祀空間などが見つかった上に、古墳時代が始まる頃の全長一〇〇メートル級の前方後円墳五基（勝山、石塚、矢塚、東田大塚、ホケノ山古墳）、全長約二八〇メートルの壮大な前方後円墳一基（箸墓古墳）を擁することから、邪馬台国の首都があったという説もあります。

他地域から運びこまれた土器

東海・北陸や山陰・山陽などの地域でつくられたり、その形を残す土器が集まっていることから、多地域から多くの人が集まる場所だったこともわかっています。

箸墓古墳

●奈良県桜井市　はしはかこふん

纒向遺跡の南端に位置する箸墓古墳は、全長約二八〇メートル、後円部の径一五六メートル、高さ約二八メートルの巨大な前方後円墳です。

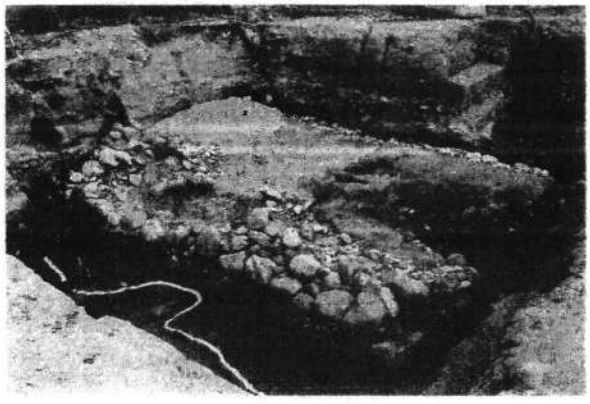
後円部は五段、前方部前面は四段の築成をもち、前方部がゆるやかに広がっているのが特徴で、古墳時代前期でも最も早い時期に築かれたと考えられています。

平野に築かれたこの古墳は古くから注目されていました。『日本書紀』ではこの古墳を三輪山の神である大物主神の妻となった倭迹迹日百襲姫命大市の墓とし、「是の墓は、日は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて、手遞伝（手渡し）にして運ぶ」と記しています。箸墓古墳は人の墓として、三輪山は神の墓として対比された意味も込められているようです。

奈良と大阪の境で採れる板状の石は、奈良盆地の竪穴式石室の石材としてよく使われています。箸墓古墳でも墳裾の発掘で破片が確認されています。

平成一〇年（一九九八）、この古墳の隣接地を発掘調査したところ、古墳の周りには濠と外堤がめぐらされ、墳丘と外堤を結ぶ渡り堤が存在したことがわかりました。

箸墓古墳全景。周濠の有無が長らく問題となっていた



箸墓古墳の墳丘と外堤をつなぐ渡り堤。左側が後円部

ホケノ山古墳

奈良県桜井市　ほけのやまこふん

箸墓古墳の東二〇〇メートルにあるホケノ山古墳は、全長約八〇メートル、後円部径約六〇メートルと、前方部が小さい前方後円墳で、箸墓古墳よりもさらに早い頃のものと見られています。

平成一一年（一九九九）より実施された調査で、後円部中央の埋葬施設が特異な構造であることが確認されました。これは、木棺が木と石で二重に囲われていたため「石囲い木槨」と名付けられ、その構造は、中国や朝鮮半島の影響を受けた可能性があります。副葬品として中国の後漢でつくられたと推測される画文帯神獣鏡のほか、土器、刀剣・銅鏃・鉄鏃が見つかっています。

石囲い木槨。木の蓋をし、その上にさらに、石を積むという二重構造であったと考えられる

石囲い木槨模式図

39 箸墓古墳 はしはかこふん

奈良県桜井市箸中

前方後円墳

墳丘長二七六㍍（現・倭迹迹日百襲姫墓）

最初の大型前方後円墳、後円部は四段、先端が撥形に広がる前方部の形が特徴。墳丘上で、特殊器台形・特殊壺形埴輪と二重口縁壺が採集されている。前方部北裾（写真上・大池の西堤）と、後円部南東の調査で、幅一〇㍍ほどの周濠状の遺構が確認された。この後、西殿塚古墳・行燈山古墳・渋谷向山古墳の大王墓が、この地域で連続して築かれる。

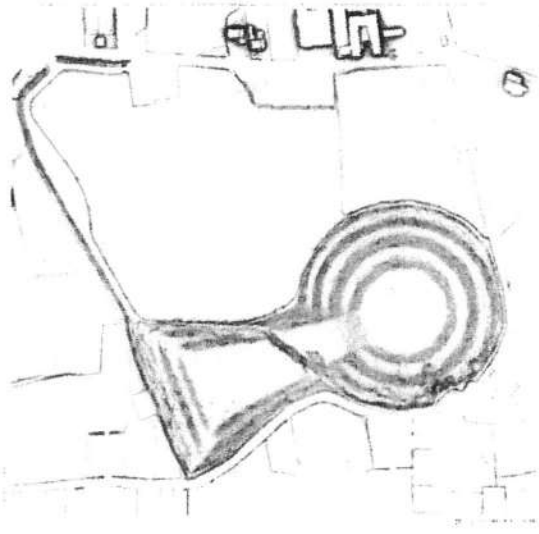


図2　箸墓古墳赤色立体地図

石積み頂上 高まる関心

奈良・箸墓古墳の宮内庁調査資料

奈良県桜井市の箸墓古墳（3世紀中ごろ～後半、全長約280㍍）。古墳時代に東北地方南部から九州までに広がった前方後円墳の原型とされ、3世紀半ばに没した邪馬台国の女王・卑弥呼の墓という説もある重要な古墳だ。その古墳の特異な構造が、朝日新聞が情報公開請求で宮内庁から入手した資料で明らかになった。石室が未盗掘で残されている可能性も指摘されている。

特異な構造 大王墓の見方

宮内庁は箸墓古墳を第7代孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫の墓として管理し、立ち入りを制限している。朝日新聞は同庁書陵部が1968年と71年、74年に前方部と後円部の最上部を調査した際の写真計55枚や、調査結果を報告した文書、出土遺物や調査地の図面などを入手した。

写真からは、5段になった後円部の最上段の全面が、こぶし大の石で覆われていることが分かった。68年の調査の報告文書には「後円部頂上全面葺き石確認」とあった。

箸墓古墳の最上段が石積み状であることは、これまでにも宮内庁の関係者がそれとなく指摘していた。同庁に陵墓管理について助言していた考古学者の故・末永雅雄氏は、75年の著書で「後円部頂は割石をもって厚く重ねほとんど石室のような景観を呈する」と記述。同庁書陵部も98年に台風で墳丘上の木が倒れた際の調査報告で「円壇（後円部最上段）斜面は（中略）積石状に石が用いられていた可能性もあろう」としていたが、実際の状況が分かる写真などは公開されていなかった。

兵庫県立考古博物館の石野博信館長（考古学）は「墳頂部の全面に葺き石が敷かれた。こんな生々しい写真は初めてみた。最初の大王墓にふさわしい特異な構造だ」と驚く。最上部に石を厚く積む構造は、弥生時代の墳丘墓から古墳への過渡的な形態と見られるという。箸墓古墳の少し前に築かれたとされるホケノ山古墳でも、埋葬施設は厚く石に覆われていた。

板石 未盗掘の可能性示す

研究者が注目するのは、後円部の石積みの裾や、前方部正面の斜面などから板状の石が出土している写真だ。過去に同庁の管理区域外での発掘でこれとよく似た板石が見つかり、「竪穴式石室が盗掘された時に転落した石材だろう」と推定されていた。だが、写真からは墳丘の材料として埋め込まれたとも推定でき、必ずしも盗掘を示すものだとはいえなくなったという。

奈良県立橿原考古学研究所などが今年、上空からレーザーで精密に測量した際にも、後円部に破壊の痕跡は見あたらなかった。桜井市纒向学研究センターの寺沢薫所長は「5段目は石積みだけでできている可能性がある。石室が4段目以下にあるとすれば、盗掘するのはかなり困難で、今も無事に残っているのでは」と推測する。

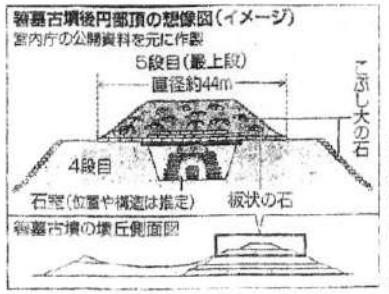
奈良県立橿原考古学研究所付属博物館の今尾文昭・学芸課長は、同古墳が調査された68年という時期に注目する。その前年、岡山県の弥生時代の墳丘墓から出土する「特殊器台」が古墳の円筒埴輪の原型になったという論文が発表され、特殊器台に似た初期の埴輪が箸墓古墳周辺で見つかることが研究者の間で話題になっていた。「宮内庁に、こうした関心に応えようという意識があったのかもしれない」

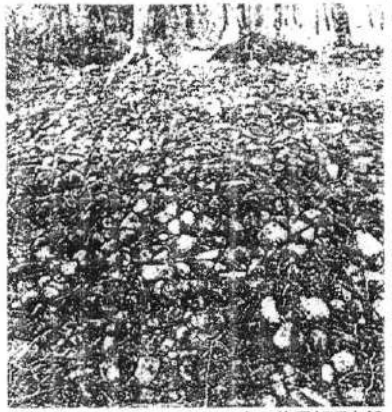
日本書紀の崇神天皇の墓には、箸墓古墳について「日は人作り、夜は神作る。故に、大坂山の石を運びて造る」と記されている。国立歴史民俗博物館の仁藤敦史教授（古代史）は「最上段にみられる大量の石が『大坂山』（現在の大阪・奈良府県境）の石の伝承とどう関わるのか、興味深い」と今後の展開に期待する。

（塚本和人）

箸墓古墳の全景
＝本社ヘリから

箸墓古墳後円部頂の想像図（イメージ）
宮内庁の公開資料を元に作製





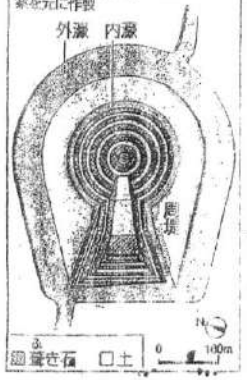
こぶし大の石を積み上げたような後円部頂上部
＝1968年、宮内庁撮影

陵墓公開 前進へ期待

《解説》古墳時代の始動を告げる巨大前方後円墳・箸墓古墳は宮内庁が管理すると「陵墓」であり、考古学研究者も自由に立ち入ることはできなかった。

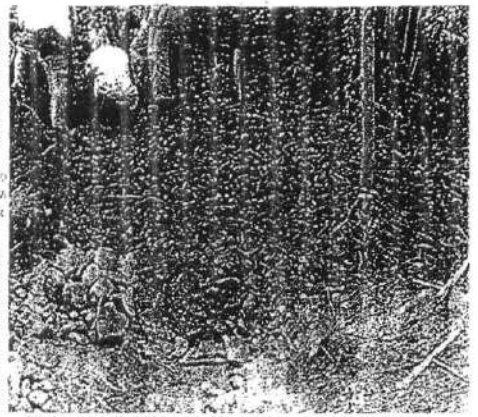
しかし、その姿を記録した資料が少数、同庁の公文書の中に埋もれていた。情報公開請求によって明かされた写真には、後円部の頂上に築かれた「石の山」がはっきり写っている。これらで同庁書陵部の調査報告（一部は

箸墓古墳の想定復元図
桜井市纒向学研究センター・寺沢薫さん、橿本和彦さんの家型元に作製



箸墓 石積みの威容

44年前の宮内庁調査



箸墓古墳の後円部最上段の裾部分。積まれた石の下から板状の石が出土している＝1968年、宮内庁撮影

邪馬台国の女王・卑弥呼の墓との説もある奈良県桜井市の箸墓古墳（3世紀中ごろ～後半、全長約280㍍）の後円部頂上部分が、全面に石を厚く積んだ特異な構造だとわかった。同古墳を管理する宮内庁がこれまで公開していなかった発掘調査の記録を朝日新聞が情報公開請求で入手し、判明した。▼36面＝誰のため

公開された文書は、築造当初の古墳の姿を確認するため、1968年に同庁が前方部と後円部の頂上付近で実施した発掘調査と、71年、74年の追加調査の記録と写真。

写真に写った後円部最上段は、全面がこぶし大の丸石に覆われていた。写真を見た複数の専門家が、最上段は大量の石を積み重ねて築かれていると推定。ほかの古墳には見られない構造だという。

宮内庁は同古墳を皇族の墓に指定して立ち入りを厳しく制限している。76年に「書陵部紀要」で同古墳で出土した土器を報告したが、詳細な発掘の記録や現場の写真は公開していなかった。古墳の測量図は公表されていたが、墳丘の構造はほとんど不明のままで、今後は過去の調査成果の公表や新たな調査を求める声が高まりそうだ。

箸墓古墳は全長280㍍を超える巨大古墳としては最も古く、全国の前方後円墳のモデルとなったと考えられている。

近年の研究で造られた時期が3世紀中ごろまでさかのぼる可能性が指摘され、中国の歴史書「魏志倭人伝」に248年ごろ亡くなったと記されている邪馬台国の女王・卑弥呼の墓とみる研究者も多い。（塚本和人）

と若干の大墳の略図でしか姿を知るすべのなかったものだ。

だが、箸墓の埋葬施設がどこにあるのか、葬られた人物が誰なのかを知るには、さらに調査を進める必要がある。

「静安と尊厳の保持」を理由に陵墓を原則非公開としてきた宮内庁も、近年は一部の陵墓で考古・歴史系学会の代表の立ち入りを認めている。一気に全面的な公開や発掘を、とはいかないだろうが、一歩の前進を期待したい。

（編集委員・小滝ちひろ）

飛鳥寺

飛鳥大仏

飛鳥寺(あすかでら)は奈良県高市郡明日香村にある寺院である。蘇我氏の氏寺で、日本最古の本格的寺院でもある法興寺(仏法が興隆する寺の意)の後身である。本尊は「飛鳥大仏」と通称される釈迦如来、開基(創立者)は蘇我馬子である。山号を鳥形山(とりがたやま)と称する。現在の宗派は真言宗豊山派。

飛鳥寺には複数の呼称がある。法号は「法興寺」または「元興寺」(がんごうじ)であり、平城遷都とともに今の奈良市に移った寺は「元興寺」と称する。一方、蘇我馬子が建立した法興寺中金堂跡に今も残る小寺院の公称は「安居院」(あんごいん)である。『日本書紀』では「法興寺」「元興寺」「飛鳥寺」などの表記が用いられている。古代の寺院には「飛鳥寺」「山田寺」「岡寺」のような和風の寺号と、「法興寺」「浄土寺」「龍蓋寺」のような漢風寺号(法号)とがあるが、福山敏男は、法号の使用は天武天皇8年(679年)の「諸寺の名を定む」の命以降であるとしている。「法興」とは「仏法興隆」の意であり、隋の文帝(楊堅)が「三宝興隆の詔」を出した591年を「法興元年」と称したこととの関連も指摘されている。なお、国の史跡の指定名称は「飛鳥寺跡」である。

飛鳥寺(法興寺)は蘇我氏の氏寺として6世紀末から7世紀初頭にかけて造営されたもので、明日香村豊浦の豊浦寺(尼寺。現在の向原寺がその後身)と並び日本最古の本格的仏教寺院である。発願から創建に至る経緯は『日本書紀』、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』(醍醐寺本『諸寺縁起集』所収、以下『元興寺縁起』という)、ならびに同縁起に引用されている「露盤銘」と「丈六光銘」に記載がある。福山敏男は、『元興寺縁起』の本文には潤色があり史料価値が劣るとする一方で、「露盤銘」は縁起本文よりも古い史料であり信頼が置けるとしている。『日本書紀』によると、法興寺(飛鳥寺)は用明天皇2年(587年)に蘇我馬子が建立を発願したものである。馬子は排仏派の物部守屋と対立していた。馬子は守屋との戦いに際して勝利を祈念し、「諸天と大神王の奉為(おほみため)に寺塔(てら)を起立(た)てて、三宝を流通(つた)へむ」と誓願し、飛鳥の地に寺を建てることにしたという。岸俊男によると、古代の「飛鳥」の地とは、飛鳥川の右岸(東岸)の、現在の飛鳥寺境内を中心とする狭い区域を指していた。

一方、天平 19 年(747 年)成立の『元興寺縁起』には発願の年は「丁未年」(587 年)とし、発願の年自体は『書紀』と同じながら内容の異なる記載がある。『元興寺縁起』によると丁未年、三尼(善信尼、禅蔵尼、恵善尼)は百済に渡航して受戒せんと欲していたが、「百済の客」が言うには、この国(当時の日本)には尼寺のみがあって法師寺(僧寺)と僧がなかったので、法師寺を作り百済僧を招いて受戒させるべきであるという。そこで用明天皇が後の推古天皇と聖徳太子に命じて寺を建てるべき土地を検討させたという。当時の日本には、前述の三尼がおり、馬子が建てた「宅の東の仏殿」「石川の宅の仏殿」「大野丘の北の塔」などの仏教信仰施設はあったが、法師寺(僧寺)と僧はなかったとみられる。『書紀』によれば翌崇峻天皇元年(588 年)、百済から日本へ僧と技術者(寺工 2 名、鑪盤博士 1 名、瓦博士 4 名、画工 1 名)が派遣された。このうち、鑪盤博士とは、仏塔の屋根上の相輪などの金属製部分を担当する工人とみられる。同じ崇峻天皇元年、飛鳥の真神原(まかみのはら)の地にあった飛鳥衣縫造祖樹葉(あすかきぬぬいのみやつこ の おや このは)の邸宅を壊して法興寺の造営が始められた。『書紀』の崇峻天皇 3 年(590 年)10 月条には「山に入りて(法興)寺の材を取る」とあり、同 5 年(592 年)10 月条には「大法興寺の仏堂と歩廊とを起(た)つ」とある。この「起つ」の語義については、かつては「(金堂と回廊が)完成した」の意に解釈されていたが、後述のような発掘調査や研究の進展に伴い、「起つ」は起工の意で、この年に整地工事や木材の調達が終わって本格的な造営が始まったと解釈されている。

『書紀』の推古天皇元年正月 15 日(593 年 2 月 21 日)の条には「法興寺の刹柱(塔の心柱)の礎の中に仏舎利を置く」との記事があり、翌日の 16 日(2 月 22 日)に「刹柱を建つ」とある。なお昭和 32 年(1957 年)の発掘調査の結果、塔跡の地下に埋まっていた心礎(塔の心柱の礎石)に舎利容器が埋納されていたことが確認されている。ただし、舎利容器は後世に塔が焼失した際に取り出され、新しい容器を用いて再埋納されていたため、当初の状況は明らかでない。『書紀』の推古天皇 4 年(596 年)11 月条に「法興寺を造り竟(おわ)りぬ」との記事がある。『書紀』は続けて、馬子の子の善徳が寺司となり、恵慈(高句麗僧)と恵聡(百済僧)の 2 名の僧が住み始めたとある。『元興寺』縁起に引く「露盤銘」にも「丙辰年十一月既(な)る」との文言があり、この丙辰年は 596 年にあたる。しかし、後述のように、飛鳥寺本尊の釈迦三尊像(鞍作止利作)の造立が発願されたのはそれから 9 年後の推古天皇 13 年(605 年)、像の完成はさらに後のことで、その間、寺はあるが本尊は存在しなかったということになる。この点については研究者によってさまざまな解釈がある。毛利久は、現存の釈迦如来像(飛鳥大仏)は、推古天皇 4 年に渡来系の工人によって造立されたもので、推古天皇 13 年から造られ始めたのは東金堂と中金堂の本尊であったとする、二期造営説を唱えた。これとは別に、久野健、松木裕美らが唱えた本尊交代説もある。すなわち、蘇我馬子が所持していた弥勒石像が当初の中金堂本尊であったが、後に鞍作止利作の釈迦三尊像が本尊になったとする。この弥勒石像は敏達天皇 13 年(584 年)鹿深臣(かふかのおみ)が百済から将来し、馬子が「宅の東の仏殿」に安置礼拝していたものである。久野説では、飛鳥寺中金堂跡に現存する本尊台座が石造であり、この台座が創建時から動いていないことから、その上に安置されていた仏像も石造であったと推定する。これに対し、町田甲一、大橋一章らは一期造営説を取り、中金堂本尊は交代していないとの立場を取る。この説では、推古天皇 4 年の「法興寺を造り竟りぬ」は、『書紀』編者が塔の完成を寺全体の完成と誤認したものとみなし、寺の中心的存在で仏舎利を祀る塔がまず完成し、他の堂宇は長い年月をかけて徐々に完成したとみる。今日では、この説が有力となっている。

飛鳥寺の伽藍については、発掘調査実施以前は四天王寺式伽藍であると考えられていたが、昭和 31～32 年(1956～1957 年)の発掘調査の結果、当初の飛鳥寺は中心の五重塔を囲んで中金堂、東金堂、西金堂が建つ一塔三金堂式の伽藍であることが確認された。

『書紀』によれば、推古天皇 13 年(605 年)、天皇は皇太子(聖徳太子)、大臣(馬子)、諸王、諸臣に詔して、銅(あかがね)と繍(ぬいもの)の「丈六仏像各一躯」の造立を誓願し、鞍作鳥(止利)を造仏工とした。そして、これを聞いた高麗国の大興王から黄金三百両が貢上されたという。『書紀』によれば、銅と繍の「丈六仏像」は翌推古天皇 14 年(606 年)完成。丈六銅像を元興寺金堂に安置しようとしたところ、像高が金堂の戸よりも高くて入らないので、戸を壊そうと相談していたところ、鞍作鳥の工夫によって、戸を壊さずに安置することができたという挿話が記述されている。一方、『元興寺縁起』に引く「丈六光銘」(「一丈六尺の仏像の光背銘」の意)には乙丑年(推古天皇 13 年、605 年)に銅と繍の釈迦像と挟侍を「敬造」したとあり、造像開始の年は一致しているが、挟侍(脇侍)の存在を明記していること、大興王からの黄金が三百二十両であることなど、細部には相違がある。「丈六光銘」によれば、戊辰年(608 年)に隋の使者裴世清らが来日して黄金を奉り、「明年」の己巳年(609 年)に仏像を造り終えたという。つまり、『書紀』と「丈六光銘」とでは、銅造の本尊(飛鳥大仏)の完成年次について 3 年の差がある。福山敏男は、仏像の完成年は裴世清らの来日の「明年」であるところ、『書紀』の編者が発願の「明年」と誤認したため、このような違いが生じたものと考証した。当時の技術水準で、丈六の銅仏が 1 年足らずで完成するとは考えにくい点などから、福山の言うように、本尊(飛鳥大仏)の完成は 609 年とするのが通説となっている。

大化の改新による蘇我氏宗家滅亡以後も飛鳥寺は尊崇され、文武天皇の時代には大官大寺・川原寺・薬師寺と並ぶ「四大寺」の一とされて官寺並みに朝廷の保護を受けるようになった。これに関連して飛鳥寺近くの飛鳥池遺跡からは大量の富本銭が発見され、その位置づけを巡って(飛鳥寺との関係も含めて)様々な議論が行われている。

都が平城京へ移るとともに飛鳥寺も現在の奈良市に移転し元興寺となった。『続日本紀』には霊亀 2 年(716 年)に元興寺を左京六条四坊に移すとあり、養老 2 年(718 年)条にも法興寺を新京へ移すとあって記述が重複している。このうち前者の「左京六条四坊」は大安寺の場所にあたることから、霊亀 2 年の記事は大安寺(大官大寺)の移転のことが誤記されたもので、飛鳥寺(元興寺)の移転は養老 2 年のことと考えられている。馬子が飛鳥に建てた元の寺も存続し、本元興寺と称されたが、建久 7 年(1196 年)に雷火で塔と金堂を焼失後、寺勢は衰えた。法隆寺僧・訓海の『太子伝玉林抄』によると、文安 4 年(1447 年)の時点で、飛鳥寺の本尊は露坐であり、江戸時代にも仮堂一宇があるのみであった。江戸時代の学者・本居宣長の『菅笠日記』には、彼が明和 9 年(1772 年)に飛鳥を訪ねた時の様子が書かれているが、当時の飛鳥寺は「門などもなく」「かりそめなる堂」に本尊釈迦如来像が安置されるのみだったという。

現在、参道入口に立つ「飛鳥大仏」の石碑は寛政 4 年(1792 年)のもので当時すでに「飛鳥大仏」と呼ばれていたことが分かる。現・本堂は江戸末期の文政 8 年(1825 年)に大坂の篤志家の援助で再建されたもので、創建当時の壮大な伽藍の面影はない。しかし発掘調査の結果、現在の飛鳥寺本堂の建つ場所はまさしく馬子の建てた飛鳥寺中金堂の跡地であり、本尊の釈迦如来像(飛鳥大仏)は補修が甚だしいとはいえ飛鳥時代と同じ場所に安置されていることが分かった。日本最古の寺院・飛鳥寺は衰退したとはいえ、21 世紀の今日まで法灯を守り続けているわけである。

歴史

bunka@asahi.com

飛鳥寺西方遺跡「槻の木の広場」

石畳 広範囲に出土

大化の改新や壬申の乱など、古代史の重要事件の舞台となった「槻の木の広場」。広場があったとされる奈良県明日香村の飛鳥寺西方遺跡の発掘から、その姿が徐々に明らかになってきた。最近、石畳が初めて広範囲に出土し、広場の中心が壮麗な石敷きだった可能性も浮上している。

飛鳥寺は日本最古の金銅仏とされる飛鳥大仏を安置した、日本初の本格的寺院。その西門跡と飛鳥川の間に西方遺跡はある。村教委が昨年8月から発掘調査を実施。東西約15メートル、南北約24メートルの範囲に、石や砂利を敷き詰めた遺構を掘りあてた。7世紀中頃以降のものとみられる。

1956年の調査開始以来、広範囲な石敷きが見つかったのは初めて。日本書紀などの文献には石敷きとの記述はないが、村教委は、槻の木の広場の中心部の可能性もあるとみる。

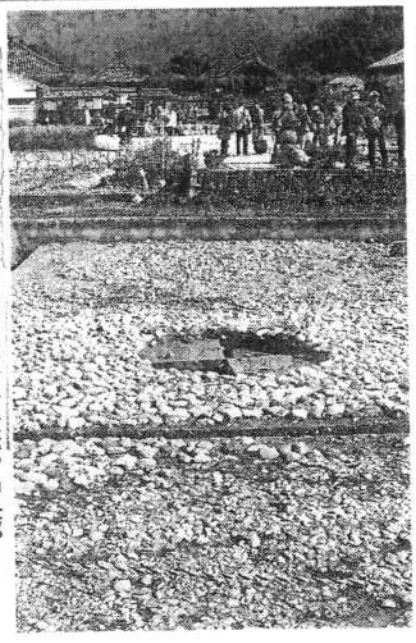
木下正史・東京学芸大名誉教授（考古学）によると、古代の人々は槻（ケヤキ）を神の宿る木と認識していた。槻の木の広場も、大化改新のきっかけとなった乙巳の変（645年）の直後、孝徳天皇が群臣を集めて誓約させていた。

日本書紀の644～695年の記述には、大化改新の立役者、中大兄皇子（後の天智天皇）と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った場面や壬申の乱（672年）で軍営地になった話などで広場が10回余り登場する。

遺跡の北側には、中大兄皇子が手がけた水時計跡、さらに北側には立派な建物群や園池などが集まった石神遺跡がある。中国大陸や朝鮮半島も激動の時代、天皇中心の中央集権国家を作り上げる過程で再開発され、政治儀式を行う宮殿の付属施設としての性格を強めていったとみられる。

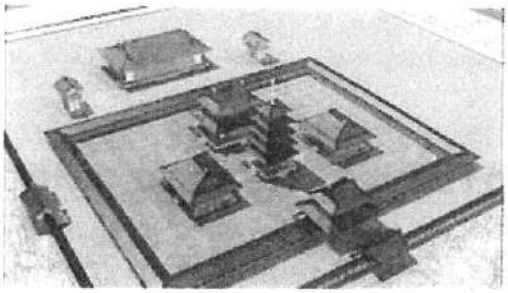
ただ、槻の木が生えていた痕跡は、まだ見つかっていない。今回の調査で、石敷きの一部に直径約1・9メートルの楕円形状に石がない部分が見つかり、現場は「槻の木の跡か」と色めき立ったが、痕跡は出てこなかった。

（塚本和人）



広範囲に石敷きが出土した飛鳥寺西方遺跡。中央部分は用途不明の穴。後方は飛鳥寺＝奈良県明日香村

＜寺域・伽藍＞



飛鳥寺（法興寺）復元図

飛鳥寺の伽藍は、塔（五重塔）を中心とし、その北に中金堂、塔の東西に東金堂・西金堂が建つ、1塔3金堂式伽藍であった。これらの1塔3金堂を回廊が囲み、回廊の南正面に中門があった。講堂は回廊外の北側にあった。四天王寺式伽藍配置では講堂の左右に回廊が取り付くのに対し、飛鳥寺では仏の空間である回廊内の聖域と、僧の研鑽や生活の場である講堂その他の建物を明確に区切っていたことが窺われる。中門のすぐ南には南門があった。回廊外の西側には西門があったことも発掘調査で判明している。塔跡は、壇上積基壇（切石を組み立てた、格の高い基壇）、階段、周囲の石敷、地下式の心礎などが残っていたが、心礎以外の礎石は残っていなかった。心礎は地下 2.7 メートルに据えられ、中央の四角い孔の東壁に舎利納入孔が設けられていた。舎利容器は建久 7 年（1196 年）の火災後に取り出されて再埋納されており、当初の舎利容器は残っていないが、発掘調査時に玉類、金環、金銀延板、挂甲、刀子などが出土した。出土品からは、この寺が古墳時代と飛鳥時代の境界に位置することが窺える。中金堂跡は、壇上積基壇跡が残るが、基壇上の礎石は残っていなかった。『護国寺本諸寺縁起集』によれば、中金堂は「三間四面　二階　在裳階」の建物で、身舎（内陣）の柱間が正面 3 間、側面 2 間、その周囲に庇（外陣）が廻り（建物の外側から見ると正面 5 間、側面 4 間）、重層の建物であったとみられる。裳階（もこし、本来の屋根の下に設けた屋根）は当初からあったものかどうか不明である。東西金堂跡の基壇は下成（かせい）基壇上に玉石を並べた上成（じょうせい）基壇を築いた二重基壇で、塔・中金堂の壇上積基壇よりは格の下がるものである。二重基壇のうち上成基壇の礎石は失われ、下成基壇には小礎石が並んでいた。この小礎石がどのように用いられたかは不明であるが、深い軒の出を支えるための小柱が並んでいたものと推定される。中門は礎石の残りがよく、正面 3 間、奥行 3 間で、法隆寺中門のような重層の門であったと推定される。奥行が深い（3 間）のが上代寺院の中門の特色である。南門も礎石の残りがよく、正面 3 間、奥行 2 間で、切妻造の八脚門であったと推定される。

昭和 52 年（1977 年）の調査で、寺域北限の掘立柱塀と石組の溝が検出された。昭和 57 年（1982 年）の調査では、寺域北側を区切る塀が南方に折れ曲がる地点、すなわち、寺域の北東隅が確認された。この結果、飛鳥寺の寺域は従来推定されていたより広く、南北が 324 メートルに達することが分かった。東西の幅については、寺域北端の塀の長さは約 210 メートルであるが、この塀の東端は南方へ直角に折れるのではなく、南東方向へ鈍角に折れており、寺域は南側がやや広い台形状になっている。主要伽藍はこの寺地の中央ではなく南東寄りに建てられており、寺域の東部と北部にはさまざまな附属建物が存在したと推定される。

釈迦如来像（飛鳥大仏）

飛鳥寺（安居院）の本尊で、飛鳥大仏の通称で知られる。1940 年に重要文化財に指定されており、指定名称は「銅造釈迦如来坐像（本堂安置）1 躯」である。像高は 275.2 センチメートル。『日本書紀』『元興寺縁起』に見える、鞍作鳥（止利仏師）作の本尊像であるが、後述のとおり損傷が激しく、後世の補修を受けている。現存する像のどの部分が鞍作鳥作のオリジナルで、どの部分が後補であるかについては、後述のように諸説ある。鞍作鳥は、法隆寺金堂本尊釈迦三尊像（623 年作）の作者であり、同三尊像の光背銘には「司馬鞍首止利」（しばくらつくりのおびととり）と表記されている。

飛鳥寺本尊像の完成は、『日本書紀』によれば 606 年、『元興寺縁起』によれば 609 年であるが、本項の「歴史」の節で述べたように後者の 609 年完成説が定説となっている。『元興寺縁起』には脇侍像の存在を明記しており、本尊像の下方にある石造台座に両脇侍像用とみられる枘穴が残ることから、当初は法隆寺釈迦三尊像と同様の三尊形式だったはずだが両脇侍像は失われ、釈迦像も鎌倉時代の建久 7 年（1196 年）の落雷のための火災で甚大な損害を受けている。1933 年に石田茂作が調査した際の所見では、頭の上半分、左耳、右手の第 2～第 4 指は鋳造後に銅の表面に研磨仕上げがされており、当初のものとみられるが、体部の大部分は鋳放し（表面の仕上げがされていない）で後世のものと思われ、脚部は銅の上に粘土で衣文をつくっており、左手は木製のものを差し込んでいるという。また、像の各所に亀裂があり、亀裂の上から紙を貼って墨を塗ったところも見受けられた。

1973 年には奈良国立文化財研究所による調査が行われたが、その結果、当初部分と考えられるのは頭部の額から下、鼻から上の部分と、右手の第 2～第 4 指のみだとされた。右手の第 2・3・4 指については、掌の部分にほぞ差しされていることがエックス線撮影によって確認されている。顔貌表現のうち、眼の輪郭線や眉から鼻梁に至る線には明らかに当初のタガネ仕上げが残っており、鍍金もわずかに残っている。頭部の下半分は造像当初から溶銅の回りきらなかった部分に象嵌や補鋳を行っていた可能性がある。本像を調査した久野健は、左の掌の一部は当初のものであるとし、左足裏と左足指の一部は焼け跡がみられることから当初のものではないかとしている。当初部分とみられる頭部について見ると、面長の顔立ちや杏仁形（アーモンド形）の眼の表現などは現存する他の飛鳥仏に共通する表現が見られる。右手の指の表現を見ると、本像では指の関節部分を 1 本の刻線で表しているのに対し、法隆寺金堂釈迦如来像は同じ箇所を 2 本の刻線で表していることが注意される。体部のほとんどが後補であるが、その服制には古様が感じられ、焼失前の形態を踏襲している可能性がある。田邊三郎助によると、本像の大衣が左肩～背～右肩と回った後、体の前面を覆って再び左肩にかかる形は北魏の古像にみられ、胸の部分に内衣の襟を V 字状に表す点は百済の像に例があり、その下に見える蝶結びのような紐の結び目も法隆寺の戊子年（628 年）釈迦及び脇侍像などにみられる古い形式であるという。

2012 年 7 月に早稲田大学の大橋一章らの研究チームが行った調査結果が同年 10 月に公表されたが、これによると現存像の大部分が造立当初のものである可能性が高いという。大橋らは、造立当初とされる部分と補修とされる部分に蛍光 X 線による分析を行ったが、その結果、両者の元素組成には顕著な差異は見られなかった。また、上記分析により金(Au)が検出された伝・光背断片をX線回折分析したところ、同断片が火災に遭ったことと鍍金されていたことが推測された。また鋳造専門家の調査でも銅を複数回注いだ継ぎ目の跡があり、奈良時代以前の技法としている。

本像は創建当初に据えられた石造台座の上に安置されている。発掘調査の結果、この石造台座は創建時から動いていないことが明らかになった。石造の台座に銅造の仏像を安置するのは不自然だとして、久野健らは当初の中金堂本尊は蘇我馬子所持の石仏の弥勒像であり、それが後に本像と入れ替わったものだと想定した。1981 年の再調査で、この台座は花崗岩ではなく、竜山石(凝灰岩)製であることが分かった。また、その上の須弥座は後補と思われていたが、内部に当初の竜山石(凝灰岩)製の須弥座の一部が残存していることが分かった。このことから、石造の台座は当初から銅造釈迦如来像を安置するために造られたものであり、飛鳥大仏は飛鳥時代から同じ場所に安置されていることがあらためて確認された。銅造の仏像を石造の台座上に安置したのは、銅造の重量を支えるだけの台座を銅で造る技術が当時なかったためではないかと言われている。

甘 樫 丘

入鹿の首塚と甘樫丘

展望台から北西方面

展望台から東方面

甘樫丘(あまかしのおか)は、奈良県高市郡明日香村豊浦にある丘陵のこと。標高 148m の、東西数百 m、南北 1km ほど広がる丘陵である。丘全体が国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区となっている。丘の北側には甘樫丘展望台、南側には河原展望台が整備されており、明日香村内や橿原市内の大和三山や藤原京などの風景を望むことができる。散策路は万葉集などで歌われた植物が植えられた「万葉の植物園路」が整備されている。この他、芝生広場・休憩所・駐車場なども整備されている。

古くは日本書紀などにも記述が見られ、誓盟の神(甘樫坐神社)が鎮座し允恭天皇の時に盟神探湯(くかたち)が行われた。大化の改新以前には蘇我蝦夷と蘇我入鹿の親子が権勢を示すために丘の麓に邸宅を構えていたという。山腹には明日香村の保全に尽力した犬養孝揮毫の万葉歌碑(志貴皇子(巻 1-51))がある。2007 年 2 月 1 日、東麓遺跡において 7 世紀前半から中頃のものと見られる建物跡や石垣を発見したと発表され、蘇我氏の邸宅跡ではないかと注目されている。

百舌鳥古墳群

もずこふんぐん

日本最大の古墳と大古墳群

堺市東部の台地上に築かれた百舌鳥古墳群は、東西約四キロ、南北約四・五キロの範囲に、数多くの古墳が点在する大古墳群です。

古墳時代中期～後期の古墳が、かつては一〇〇基以上存在していましたが、現在は半壊状態のものを含めて四〇基余りを残すだけです。これらの古墳には、宮内庁が天皇陵に比定している巨大古墳も多くありますが、その比定については問題があります。

大山古墳は、百舌鳥古墳群を代表する日本最大の古墳で、宮内庁は仁徳天皇陵としています。

墳丘は、全長約四八六メートル、後円部径は約二四九メートル、後円部の高さは約三五メートル、左右のくびれ部に造り出しがあります。三重の濠がめぐっていますが、三重目は明治時代に掘られたものです。明治五年（一八七二）に墳丘が一部崩れて、竪穴式石室が現れ、長持形石棺と、金銅製の甲そして その詳細な絵図が残されています。これらの資料から築造は古墳時代中期中頃と考えられています。

そして、周囲には陪塚と呼ばれる小古墳が一〇基以上築かれています。

百舌鳥陵山古墳は日本で三番目の規模をもつ前方後円墳で、全長三六〇メートル、後円部の径は約二〇五メートルです。

宮内庁は仁徳天皇の子である履中天皇の陵に定めていますが、古墳の形式や周辺にある陪塚と見られる古墳の出土品からその築造は大山古墳より古い古墳時代中期前半と考えられます。

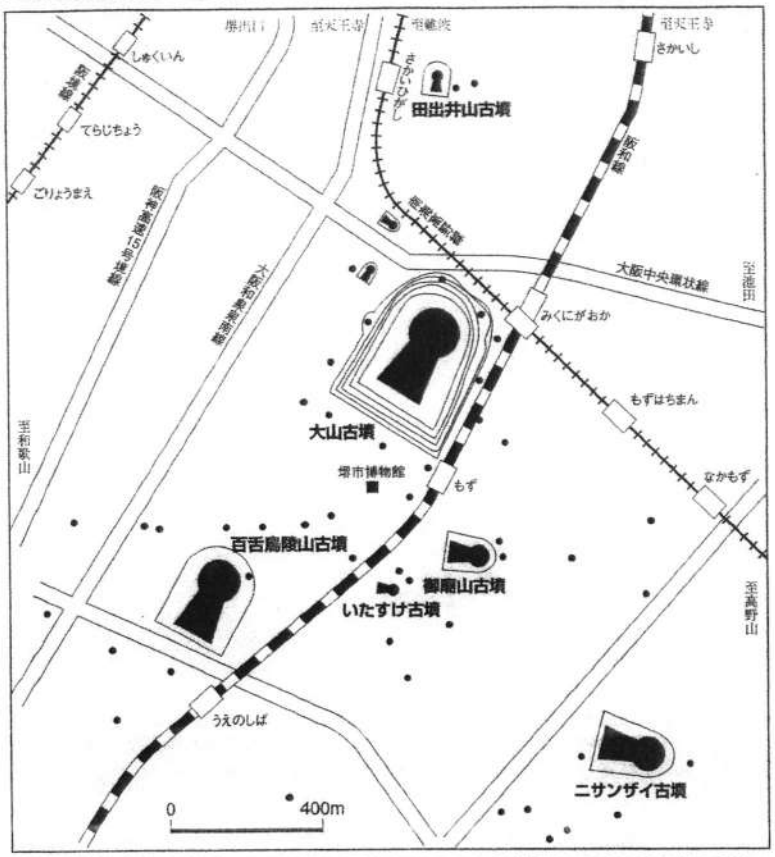
ニサンザイ古墳は日本で八番目の規模メートル 後円部の径は約一五六メートルあります。古墳時代中期末頃の築造と見られます。

ほかにも、御廟山古墳・いたすけ古墳・田出井山古墳（反正天皇陵）など大型の前方後円墳があります。さらに中小の前方後円墳や円墳があり、その被葬者は、権力者の周辺や地域の有力者などと考えられています。

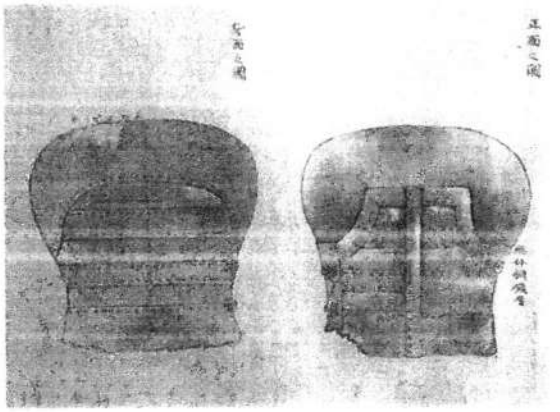
残念ながら、いずれも古墳内部は見学することができませんが、一帯を散策すれば、その大きさと密集度がよくわかります。

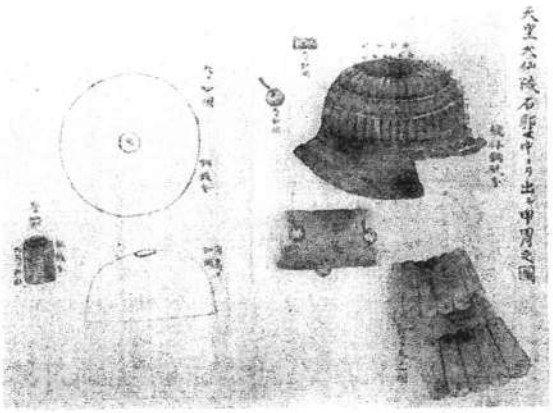
また、堺市博物館では関連展示や遺物を見学できます。

百舌鳥古墳群分布図



●印も古墳を表す





明治5年（1872）、大山古墳の前方部の竪穴式石室から出土した遺物の絵図。甲冑は、現在では模写だけが残されている

× 長持形石棺が発掘された場所

121 百舌鳥古墳群 もずこふんぐん

大阪府堺市

上の写真は北上空から、下の写真は北東上空から、古墳群全体を望む。古墳の主軸が南北の大山・百舌鳥陵山古墳などに対して、東西方向の土師ニサンザイ・百舌鳥御廟山・いたすけ古墳などは南東部に集中し、これらのほうが時期が下る。大阪湾に面した立地は、海からの眺めを意識して築かれた古墳群であることがわかる。

●大阪府藤井寺市・羽曳野市

古市古墳群

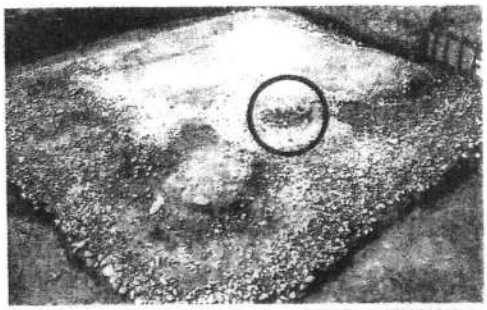
ふるいちこふんぐん

時代によって変貌する大古墳群

百舌鳥古墳群と並んで日本二大古墳群と称される古市古墳群は、藤井寺市、羽曳野市にまたがる丘陵地帯の東西約三キロ、南北約四キロに広がっています。ここは大和川と石川との合流点に近く、海へと通じる大和川水系の要所となっています。

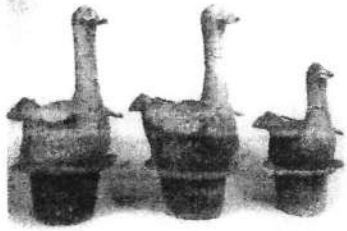
古市古墳群も古墳時代中期～後期にわたって、巨大古墳から、一辺が一〇メートルにも満たない小古墳まで、大小合わせて約一〇〇基にものぼる古墳が築造されています。

これらのほとんどの古墳から円筒埴輪が出土しているので、各古墳の築造年代がある程度わかります。



津堂城山古墳の内濠の中から発見された特異な方墳状施設（一辺17m、高さ1.5m）。巨大な水鳥形埴輪が3点配されていた（○印）

比較的状況がわかっている津堂城山古墳は、古市古墳群の西の端に位置する大型の前方後円墳で、古市古墳群が形成され始めた古墳時代前期末～中期初めにかけて築造されました。墳丘の全長は二〇八メートルで、二重の濠と堤、造り出しを備えており、濠には方形の浮島がつくられていて、水鳥埴輪が一点、渚に立てられていました。



水鳥形埴輪。右は高さ80cm、左の2点は107cm

後円部には、竪穴式石槨におさめられた豪壮な長持形石棺がありました。

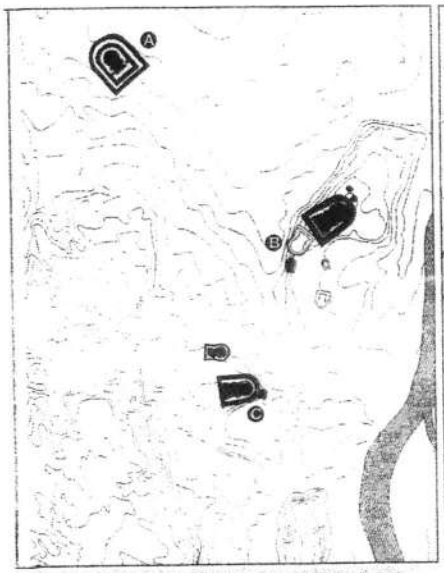
墳頂部以外は史跡となっていて見学することができます。

古墳時代中期前半の大型前方後円墳、仲津山古墳や墓山古墳になると、墳丘が三段築成に整備され、周辺に陪塚を配置した形式に整えられました。

古墳時代中期半ばの誉田山古墳は、全長四二五メートルと、日本で二番目の規模で、宮内庁は応神天皇陵としています。誉田八幡宮に残る陪塚の丸山古墳出土と伝わる馬具、鋲留式甲冑、曲刃鎌などの副葬品からは新しい品々や、金や銅製品の普及が伺えます。

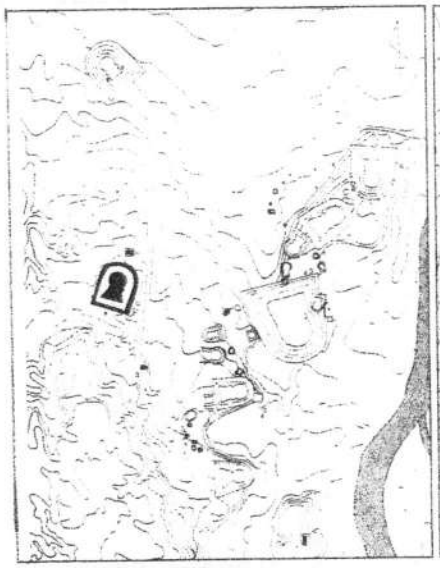
古市古墳群の変遷

●黒く塗ってあるのが各時期につくられた古墳



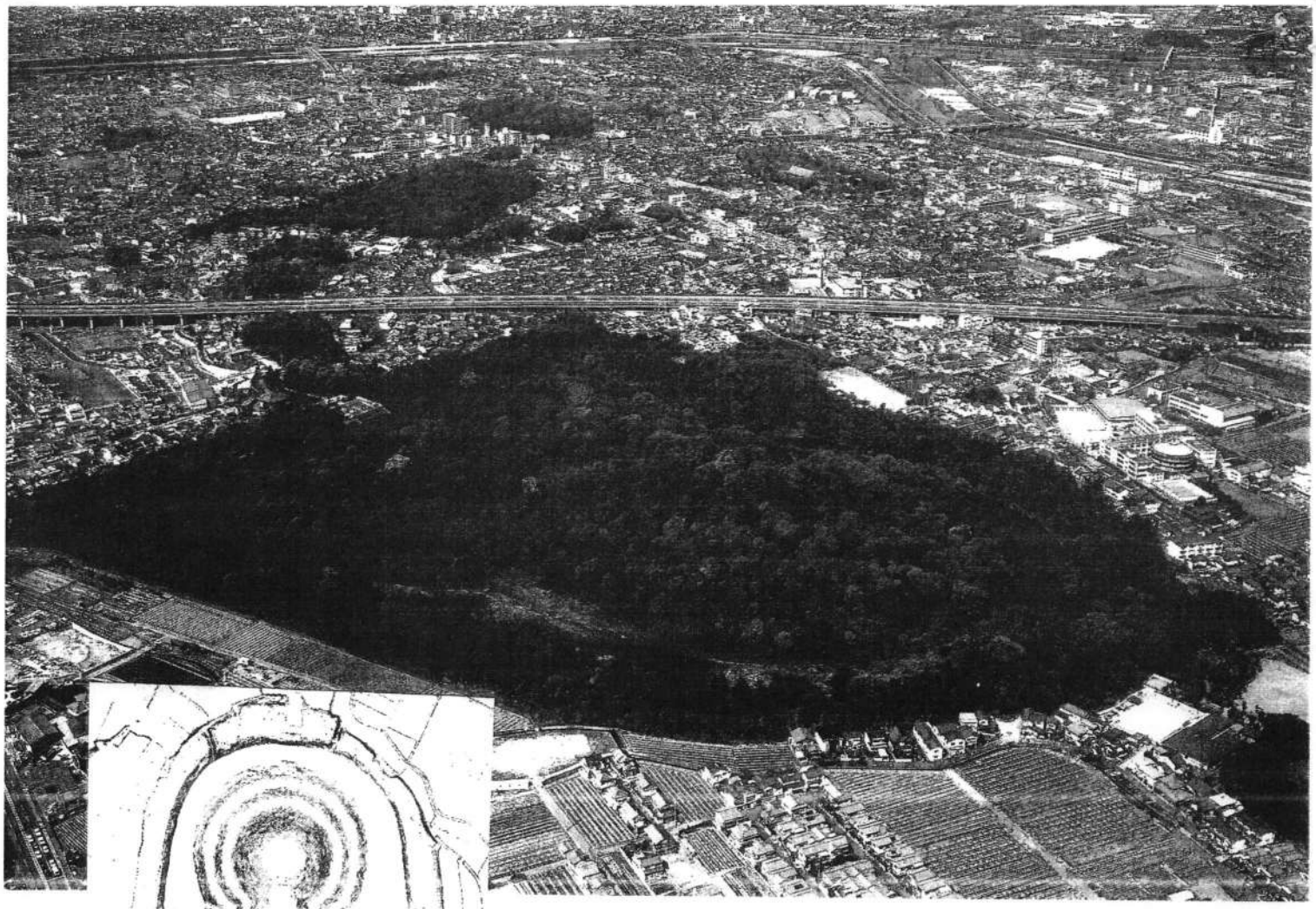
①古墳時代前期～中期前半　Ⓐ＝津堂城山古墳、Ⓑ＝仲津山古墳、Ⓒ＝墓山古墳

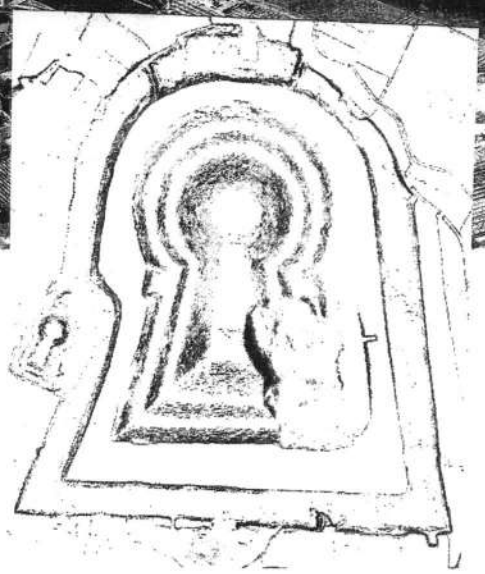
②古墳時代中期中頃　Ⓓ＝誉田山古墳



③古墳時代中期後半～後期初頭

④古墳時代後期前半





108 誉田御廟山古墳 こんだごびょうやまこふん

大阪府羽曳野市誉田

前方後円墳　墳丘長四二五㍍（現・応神天皇陵）

誉田山古墳とも呼ぶ。墳丘長は堺市大山古墳に次ぐが、墳丘の体積ではこれを上回る。五世紀中葉。三段の墳丘、左右の造り出し、二重に巡る周濠と堤がある。円筒埴輪は、いずれも窖窯焼成のもの。前方部の西側（下の写真右側）が大きく崩れていて、地震による地滑りの可能性が考えられる。誉田八幡宮に、丸山古墳の金銅製鞍金具や、長持形石棺の一部が所蔵されている。

道明寺天満宮

拝殿

道明寺天満宮（どうみょうじてんまんぐう）は、大阪府藤井寺市道明寺に位置する神社である。祭神は菅原道真公、天穂日命と、菅原道真公のおばに当たる覚寿尼公である。隣接して道明寺という真言宗の尼寺がある。この地は、菅原氏・土師氏の祖先に当たる野見宿禰の所領地と伝え、野見宿禰の遠祖である天穂日命を祀る土師神社があった。仏教伝来後、土師氏の氏寺である土師寺が建立された。伝承では聖徳太子の発願により土師八島がその邸を寄進して寺としたという。平安時代、土師寺には菅原道真公のおばに当たる覚寿尼公が住んでおり、道真公も時々この寺を訪れ、この寺のことを「故郷」と詠んだ詩もある。延喜元年（901 年）、大宰府に左遷される途中にも立ち寄って、覚寿尼公との別れを惜しんだ。道真公遺愛の品と伝える硯、鏡等が神宝として伝わり、6 点が国宝の指定を受けている。後に、道真自刻と伝える十一面観音像を祀り、土師寺を道明寺に改称した。天暦元年（947 年）のことという。道真ゆかりの地ということで、道明寺は学問の神としての信仰を集めるようになった。明治の神仏分離の際、道明寺天満宮と道明寺を分け、道明寺は道を隔てた隣の敷地に移転した。現在も学問の神として地元の人々に親しまれている。また境内には 80 種 800 本の梅の木があり、梅の名所として知られている。

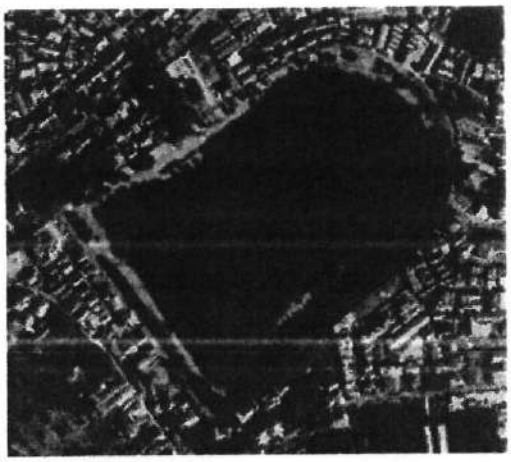
道明寺

本堂

道明寺（どうみょうじ）は、大阪府藤井寺市にある真言宗御室派の尼寺。山号は蓮土山。道明寺周辺は、菅原道真の祖先にあたる豪族、土師（はじ）氏の根拠地であった。道明寺は土師氏の氏寺土師寺として建立され、今の道明寺天満宮の前にあった。当時は七堂伽藍や五重塔のある大規模なものであった。

901 年(延喜元年)、大宰府に左遷される道真がこの寺にいた叔母の覚寿尼を訪ね「鳴けばこそ別れも憂けれ鶏の音のなからん里の暁もかな」と詠み、別れを惜しんだと伝えられる。この故事は、後に人形浄瑠璃・歌舞伎の『菅原伝授手習鑑』「道明寺」の場にも描かれている。道真の死後、寺名は道明寺と改められるが、これは道真の号である「道明」に由来する。1575 年(天正 3 年)には、兵火で天満宮を含む寺の大部分が焼失するが、後に再興。1872 年(明治 5 年)の神仏分離により道明寺天満宮境内から現在地に移転した。

中ツ山古墳（中津媛皇后陵）



仲ツ山古墳(なかつやまこふん、仲津山古墳とも)は、大阪府藤井寺市沢田4丁目にある前方後円墳。現在、宮内庁によって、仲津媛(応神天皇の皇后)の陵墓に治定されている。

古市古墳群の北部、誉田御廟山古墳の北東に位置する。全長約 290 メートル、後円部径約 170 メートル、高さ約 26.2 メートル、前方部幅約 193 メートル、高さ 23.2 メートルで、古市古墳群で 2 番目、全国でも 10 番目の大きさを誇る。墳丘は三段築成で、葺石と埴輪が確認される。くびれ部の両側には造り出しがある。国府台地の最高所にあるため、周濠は空濠に近い湿地帯になっている。主体部については不明であるが、石棺が存在することや勾玉が出土したことが伝えられている。また、発掘調査により、外堤外法面に葺石が施されていることが判明した。出土した埴輪の特徴から、古市古墳群の巨大前方後円墳では、津堂城山古墳に次いで古く、5 世紀前半の築造と推定されている。

まほろば会奈良旅行の見どころ

南都七大寺は仏像が面白い！

平成25年11月15日～17日

資料提供 恒成

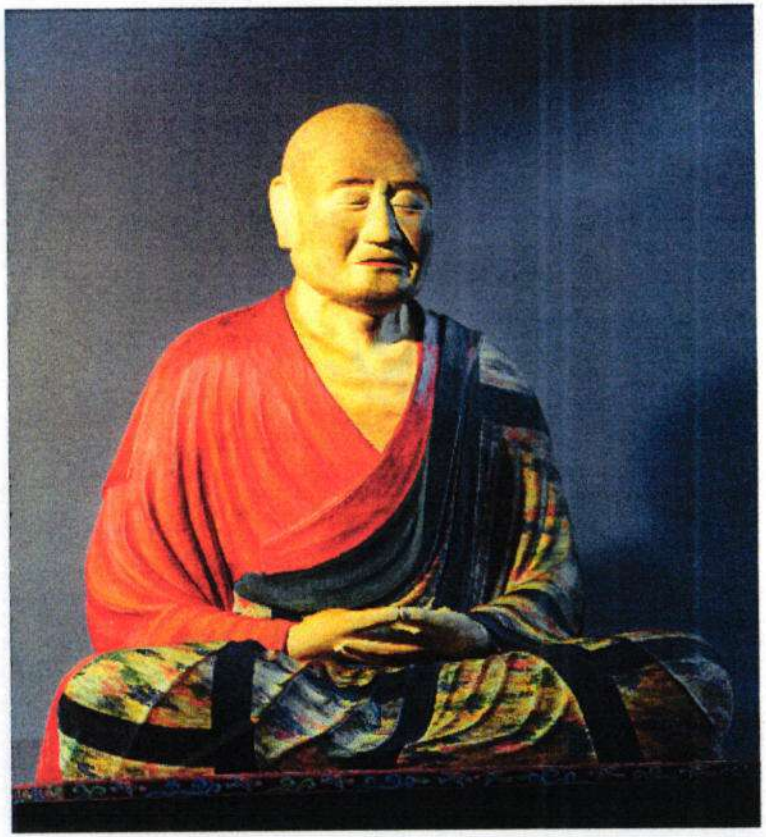
西大寺

愛染堂本尊の愛染明王像

西大寺を復興させた叡尊が、弘安四年(1281)十万あまりの大軍で来襲してきた蒙古との戦いを避けるため「敵兵を殺めず、船ごと送り返してください」と渾身の祈祷を行ったといいます。そして結願の夜に、宝殿の扉が開き明王の持つ鏑矢が妙音を発して西に飛び、暴風雨を起こして蒙古船を沈ませたと伝えられています。

唐招提寺

鑑真和上像（お身代わり像）



【作り方＝脱活乾漆造り】
粘土で原像を造り、その上に漆を浸した麻布（まふ）を貼っていく。細部は木の粉（普通は檜を使うが実物は楡の木を使っていたため当像でも楡の木を採用）や繊維くずを漆に混ぜペースト状にした木屎漆（こくそうるし）で整える。また、一般に木屎漆はヘラを使うが当像は指を使っていた。最後に背中から粘土を掻き出して中を空洞にする。

唐招提寺

盧舎那仏坐像（本尊）　千手観音立像
薬師如来像（いずれも金堂在）

盧舎那仏坐像

薬師如来立像

千手観音立像

本尊の盧舎那仏だけが脱活乾漆造り、薬師世来・千手観音は木心乾漆津造り脱活から木心、一木造りに移る過渡期の貴重な作例

唐招提寺

四天王のうち、増長天立像・持国天立像（講堂在）

増長天立像

持国天立像

講堂の本尊である弥勒如来坐像の脇に立つ四天王。増長天は他の寺の四天王と違い衣の文様の密度が非常に濃い。鑑真和上と一緒に来た中国人仏師の作。持国天は日本の仏師が彼らの指導を受けて彫ったもので出来栄えに差がある。他の2体はあじさい寺で有名な矢田寺に移されている。

薬師寺

金堂の本尊である薬師如来坐像

薬師如来が座っておられる台座には、奈良時代における世界の文様が集約されています。一番上の框[かまち]にはギリシャの葡萄唐草文様[ぶどうからくさもんよう]、その下にはペルシャの蓮華文様[れんげもんよう]が見られます。各面の中央には、インドから伝わった力神(蕃人[ばんじん])の裸像が浮彫りされています。さらに、下框には、中国の四方四神(東に青龍[せいりゅう]、南に朱雀[しゅじゃく]、西に白虎[びゃっこ]、北に玄武[げんぶ])の彫刻がなされています。正にシルクロードが奈良まで続いていたのです。

薬師寺

日光・月光菩薩立像（金堂在）と聖観世音菩薩立像（東院堂在）

日光菩薩立像

月光菩薩立像

聖観世音菩薩立像

ともに白鳳時代を代表する金銅仏。三者共、白鳳仏の特徴である、足首をはっきり見せています。ただ、日光・月光はこころもち中央に腰をひねったポーズに対し聖観音菩薩はほぼまっすぐに立っています。また、背面は平面的で正面性が強く出ています。

薬師寺

東塔の水煙

東塔の相輪の上部に組まれた装飾物。天上から舞い降りる24人の飛天の透かし彫りが見られます。現在東塔の解体修理のため、水煙が降ろされ特別会館に展示されています。いつもは、地上34メートルの高所にある水煙を目の前で拝観できます。また、相輪の下部に129文字で天武天皇が皇后の病気平癒を願い建立を発願したことが記されています。因みに東塔の完成は平成30年とのことです。

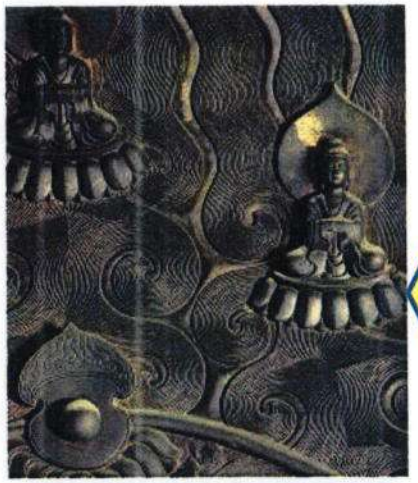
法隆寺

百済観音像（観世音菩薩立像）

法隆寺の古い記録には記載がなく今なお謎に包まれています。あらゆる角度から拝観できる形で安置されています。この像は側面性にも目をそそいでいるので、角度をかえて前後左右よりじっくり観察すると良いとのことです。顔立ちは女性的で、柔和な表情です。フランスでは日本のヴィーナスと大絶賛されたそうです。

法隆寺

釈迦三尊像



火焔紋（かえんもん）の流れが美しい光背。
七体の化仏が配置されています。緻密な造詣です。

釈迦三尊像は、安居院（あんごいん）の「飛鳥大仏」とともに、仏教が日本に伝来して初めて作られた仏像の一つです。30cmと小さく、薄暗く遠いので良く見えないことが残念です。よって、写真を多めに貼っておきます。

天蓋には飛天が。
童子ような顔で色々な楽器を手にしています。
通常は見えない部分にも力を入れています。
さすがは止利仏師。

法隆寺

夢違観音立像（大宝蔵殿第三室在）

第三室のハイライト。小さな逸品です。悪い夢を見たときに、この観音様にお願いをすると良い夢に替えてくれるという逸話があります。典型的な白鳳彫刻です。

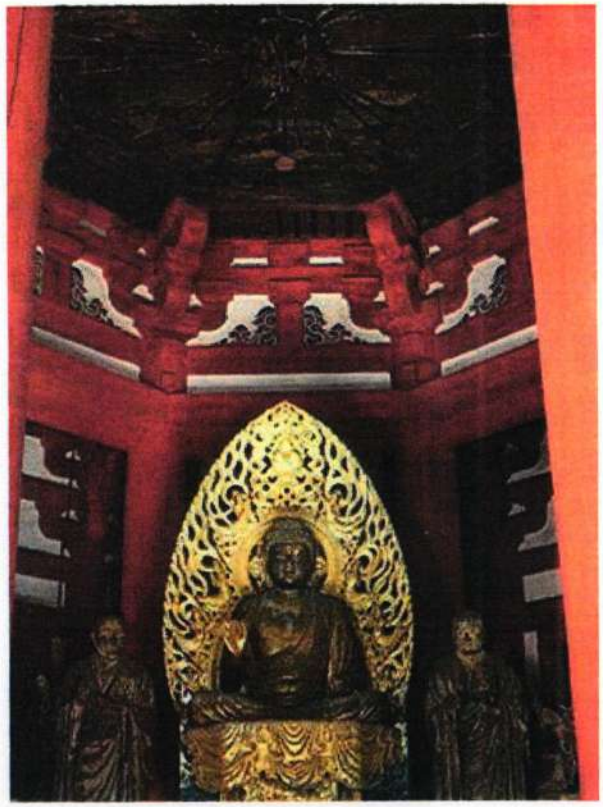
法隆寺

救世観音像（夢殿）

この像は、フェノロサによって見出されるまで数百年の間、白衣ぐるぐる巻きの秘仏とされ、フェノロサが白布を解く時に寺僧達は悉く逃げ出したと伝えられています。夢殿と救世観音は聖徳太子の藤原氏に対する祟りを鎮めるために作られたものであり、怨念・祟りと関係がありそうです。また、光背は背中で支えるのが普通ですが、この像には頭と胸に釘が打ち込まれています。十字の木組みの真ん中にも釘が打ち込まれており、何か激しい怨念を感じます。

興福寺

弥勒仏坐像（北円堂）



運慶の仏像が安置されている空間が造像当時のまま残るのは、南大門の金剛力士像と興福寺の北円堂だけです。この像は運慶の最高傑作と言われています。鎌倉期の再建の際、この北円堂は運慶一門の担当だったとのことです。残念ながら北円堂の特別開扉期間は11月10日までで、今は見られないと思います。

興福寺

阿修羅立像（国宝館）

この優しい面持ちの阿修羅像は、本来の阿修羅王は、この像から想像するような優美な神ではありませんでした。 古代インド神話の阿修羅王は、帝釈天を向こうに廻して、荒々しい合戦を繰り返す悪神で、容貌醜怪な札付きの外道とされています。

興福寺の阿修羅像は、この神が釈迦の教化によって仏法の守護神となった姿で、天界を暴れ廻る鬼神のイメージはありません。この像は、旧西金堂に安置されていましたが、火災の際軽い乾漆像だったため、早く搬出することができ、今に残っています。

興福寺

天燈鬼・龍燈鬼（国宝館）

天燈鬼

龍燈鬼

かついでいる燈籠は明治の修理の時、勝手に付け加えられたものです。これらの像はバラバラの古材であり、仏像の修理用の材木として職人たちに提供されたものでした。つまり興福寺側は、それが鬼の彫刻である事もわからなかった。職人の森川杜園が、この古材を組み合わせると鬼の彫刻になることに気づき、なんとなく形になり、様になってきたので、燈籠を新しく作り付け加え、今の姿になったということです。

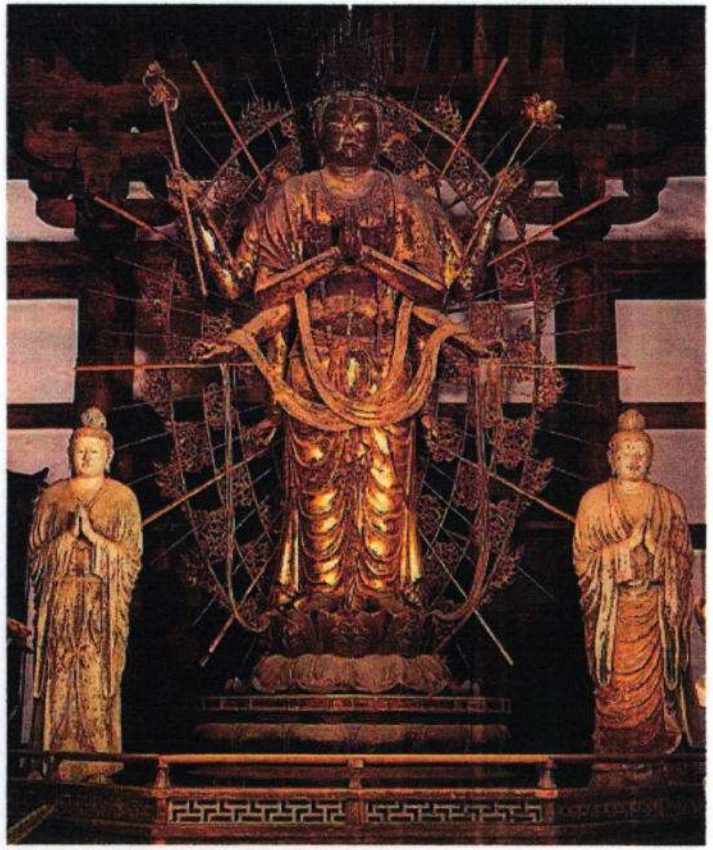
興福寺

銅造仏頭（国宝館→興福寺仏頭展：上野）

白鳳時代の作で、頭部のみ残っていますが、白鳳文化を代表する作品。旧山田寺仏頭とも。元来、飛鳥の山田寺（現・奈良県桜井市）講堂本尊薬師三尊像の中尊像の頭部で、東金堂にあったが、室町時代の火災で頭部だけがかろうじて焼け残りました。（この火災により、右耳付近が大きく変形している）。この頭部は新しく作った本尊像の台座内に納められて長らく人目にふれず、1937年（昭和12年）に再発見された。この時には他に、類例の少ない銀製の仏像の腕（重文）も発見されています。

東大寺

不空羂索観音立像（法華堂）



法華堂は3年に亘る修理事業を終えて25年5月から拝観が再開されています。その法華堂の本尊です。額に目を表し8本の手を持つ三目八臂の像。なお、本像の頭上にある銀製の宝冠も、奈良時代の工芸遺品として価値の高いものです。両側に日光・月光菩薩を従えています。

東大寺

四天王立像（戒壇堂）

持国天　　多聞天　東大寺戒壇院　天平時代

広目天　　増長天

東南隅に剣を持つのが持国天、西南隅に槍を携えて立つのが増長天。北西隅に巻物を持つのが広目天、北東隅に宝塔を高く掲げているのが多聞天です。足元の邪鬼の表情も面白いので良く観察してください。

東大寺

盧舎那仏（奈良の大仏）

これはもう説明不要ですね！ただ、何のため、盧舎那仏とは「智慧の光を宇宙いっぱいに輝かせる仏さま」という意味だそうです。創建時の大仏殿は正面幅が86㍍あり、現在の57㍍を凌ぐ巨大建築でした。大仏の像高は14.98㍍、重量250トンです。

大安寺

十一面観音立像

平素は秘仏で、10月～11月が特別公開期間です。がん封じのご本尊であり、一木造り。
大安寺の九体の木彫仏は、奈良時代から平安時代に移ろうとする過渡的な作品といえるもの。
奈良時代の末期から密教的な仏像が多く造立されるようになり、次の平安時代には全盛期を迎えます。

大安寺

馬頭観音立像

一木造り。一般に馬頭観音様は、頭上に馬頭をいただく忿怒の形相ですが、この尊像にはその馬頭がありません。かわりに胸飾りの瓔珞（装身具）と足首に蛇が巻きつき、腰には獣皮をまとっている極めて珍しい姿です。儀軌以前の古像で、馬頭観音の原初の姿とも考えられます。

馬頭観音様は、馬が牧草を食むように、もろもろの悪を食い尽くし、たくさんの水を一気に呑み干すように私達の災厄を除くといい、厄除けの仏として信仰されます。